

茨城県教育財団文化財調査報告第308集

# 薬師後遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下 卷

平成21年3月

国土交通省常総国道事務所  
財団法人茨城県教育財団





茨城県教育財団文化財調査報告第308集

やく し うしろ  
薬 師 後 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下 卷

平成21年3月

国土交通省常総国道事務所  
財団法人茨城県教育財団



# 目 次

## － 下 卷 －

第7節  まとめ.....	635
付章.....	660
写真図版	
抄録	



## 第7節 ま と め

### 1 はじめに

平成18・19年度の調査で、当遺跡は旧石器時代から近世にわたって人々の生活の場として利用されていたことが判明した。様々な時代の遺構や遺物が確認されたが、中心となるのは、古墳時代後期（6世紀後葉）から平安時代（10世紀中葉）にかけての約400年間である。

調査で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴2基及び遺物包含層1か所、古墳時代の竪穴住居跡93軒、地点貝塚1か所、土坑8基及び遺物包含層3か所、奈良・平安時代の竪穴住居跡81軒、掘立柱建物跡18棟、竪穴状遺構2基、地点貝塚3か所、土坑28基及び遺物包含層1か所、中世・近世の方形竪穴遺構7基、火葬土坑5基、地下式坑1基、粘土貼土坑1基、土坑102基、溝跡26条、時期不明の竪穴住居跡9軒、地点貝塚2か所、溝跡23条、道路跡2条、土坑490基、ピット群5か所である。また、出土した遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・椀・高台付椀・皿・高台付皿・埴・高坏・鉢・壺・甕・甑・置き竈・ミニチュア土器・手捏土器・コップ形土器）、須恵器（坏・高台付坏・盤・蓋・高盤・鉢・横瓶・提瓶・瓶・甗・壺・甕・甑・円面硯）、土師質土器（小皿・内耳鍋）、灰釉陶器（椀・瓶・壺）、緑釉陶器（段皿）、陶器（平碗・折縁小皿・反り皿・片口鉢・播鉢）、土製品（勾玉・小玉・土玉・球状土錘・管状土錘・支脚・紡錘車・羽口）、石器（ナイフ形石器・搔器・石匙・磨製石斧・磨石・砥石）、石製品（管玉・白玉・双孔円板・紡錘車・剣形模造品）、鉄製品（刀子・鎌・鎌・門・鑿・釘・火打金）、銅製品（耳環、煙管）、古銭（北宋銭）、貝（ヤマトシジミ・ハマグリ・モノアラガイ・カワニナ・カキ）、骨（ニワトリ）などである。

ここでは、2次にわたる調査で判明した、それぞれの時期の検出遺構と出土遺物を中心に、これらの時代の様相について述べる。

なお、竪穴住居跡については小形・中形・大形に区別する。最大規模の住居跡（長軸8.93m）と最小規模の住居跡（長軸2.32m）の長軸の差から、それぞれ長軸4.5m未満、4.5m以上6.5m未満、6.5m以上とした。また、掘立柱建物跡も小形・中形・大形に区別し、それぞれ面積20㎡未満、20㎡以上40㎡未満、40㎡以上とした。

### 2 旧石器時代の様相

当時代の遺構は確認されていないが、6点の石器が確認されている。東部からはナイフ形石器1点（頁岩）、搔器1点（頁岩）、剥片3点（頁岩1・瑪瑙2）が、西部からはナイフ形石器1点（チャート）が出土している。それぞれ時代の異なる遺構の覆土中からの出土であるため、正確な位置や層位を確認することができなかった。

### 3 縄文時代の様相

当時代の遺構は陥し穴2基、遺物包含層1か所が確認されている。陥し穴は台地斜面部や台地先端部に位置している。東部においては、南側へ傾斜する斜面部に遺物包含層が存在する。包含層は堆積過程において陥し穴を掘り込んでいる。縄文土器片が多数出土し、早期から前期の間に徐々に堆積していったものと考えられる。陥し穴は、遺物は出土していないが、包含層との重複関係から縄文時代と考えられる。また、東側の台地先端部にかけて、遺構中から多くの縄文土器片や石器（搔器・石匙）などが出土している。時期は前期と後期の土器が中心で、特に前期の割合が多い。中央部では遺構は確認されていないが、台地平坦部から斜面部に至る遺構の覆土中や南側に位置する古墳時代の包含層から縄文土器片が多数出土している。土器片

は、早期から前期、後期にわたっているが、特に早期のものが多い。西部では北西側の台地際から陥し穴1基が確認されている。

#### 4 古墳時代の様相（第513～516図）

当時代に該当する遺構の調査区別内訳は、Ⅰ区が竪穴住居跡18軒、土坑3基、Ⅱ区が竪穴住居跡23軒、地点貝塚1か所、土坑4基、遺物包含層1か所、Ⅲ区が竪穴住居跡43軒、遺物包含層2か所、Ⅳ区が竪穴住居跡9軒、土坑1基である。

これらの遺構は、おおむね古墳時代後期の6世紀から7世紀前葉にかけてのものである。そこで当時期を4期に細分し、該当する遺構を中心に、それぞれの時期の特徴をまとめることとする。

##### (1) Ⅰ期〔6世紀前葉〕

当期の住居跡は、第50・54・62・63・65・70・77・85・86・97・102・104・106・107・113・150号住居跡の16軒が該当する。当期は大形から小形の住居跡が存在し、その内訳は、大形住居5軒（第50・54・86・104・107号住居跡）、中形住居6軒（第65・70・77・97・102・113号住居跡）、小形住居4軒（第62・63・85・106号住居跡）、規模不明が1軒（第150号住居跡）である。最大規模の住居跡は第86号住居跡で、推定長軸8.04mの長方形である。最小規模の住居跡は第62号住居跡である。大形と中形の住居跡の割合が高い。

内部施設は小形住居には主柱穴が確認されていない。中形・大形住居では、壁溝が第70号住居跡で欠落している他は、竈・主柱穴・出入り口ピット・壁溝を有している。この期の一般的な形態と考えられる。また、当遺跡において貯蔵穴を有している住居跡は、この時期の3軒（第86・106・113号住居跡）の事例のみである。当期をもって、貯蔵穴が消滅すると考えられる。

主軸方向は、他の時代の遺構に掘り込まれて不明な住居跡があるが、第63号住居跡が西竈、第113号住居跡が東竈である他は、多くが北竈の形態であると考えられる。

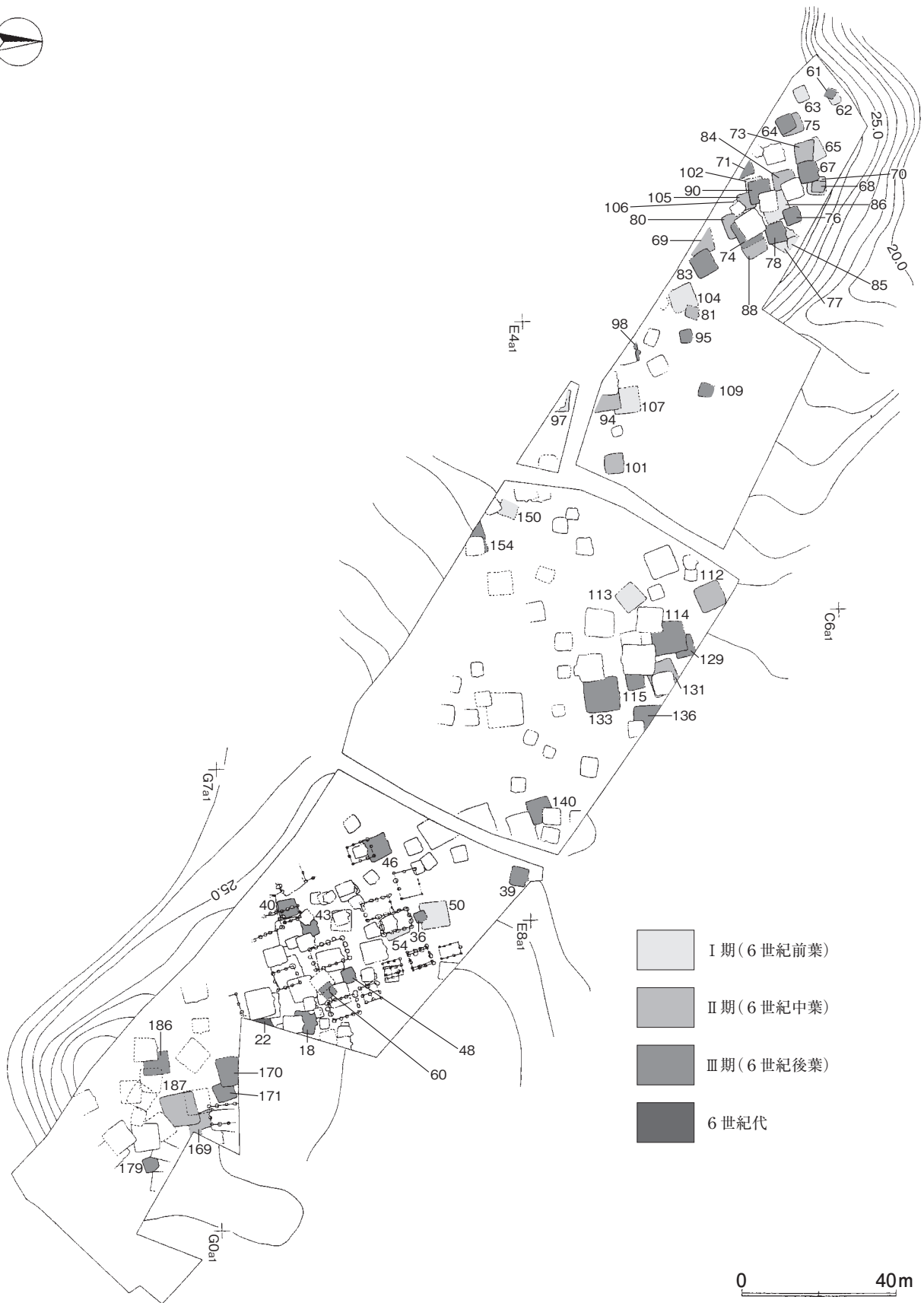
全体を通して、住居跡は西部の9軒からなる一群、中央部やや西寄りの4軒からなる一群、東部の2軒からなる一群の3グループに分けられる。西部では、大形住居の住居跡を取り囲むように、小形・中形住居が配置されているが、他の地域でははっきりした傾向はみられない。

出土遺物は土師器（坏・碗・埴・高坏・壺・甕・甑・手捏土器）、土製品（土玉・球状土錘・管状土錘・支脚）、石器（砥石）などである。

##### (2) Ⅱ期〔6世紀中葉〕

当期の住居跡は、第68・69・73・75・80・81・84・88・94・101・105・112・131・169・187号住居跡の15軒が該当する。その内訳は、大形住居3軒（第131・169・187号住居跡）、中形住居8軒（第39・73・75・80・84・94・101・112号住居跡）、小形住居3軒（第68・81・105号住居跡）、規模不明が1軒（第88号住居跡）である。最大規模の住居跡は第131号住居跡で、推定長軸8.54mの長方形である。最小規模の住居跡は第68号住居跡である。よって当期の住居跡は、規模は前期を踏襲しているが、Ⅰ期に比べると、中形の割合が増え、大形と小形が減少している。住居規模が全体的に少し大形化している。

内部施設は、ほとんどの住居跡で竈が確認された。前期と同様に北竈主体であるが、例外もまだ認められる。また、主柱穴を有し、前期の一般的な形態を示しているが、壁溝を有していない住居跡が増加している。なお、第121号住居跡は、竈を北西壁から北東壁へ作り替えている。東竈のため、出入り口施設とは向かい合わなくなっている。また、第187号住居跡は多量の炭化材と焼土塊が確認されていることから、



第513図 集落変遷図（6世紀）

住居の機能停止後に取り壊し、または部分的に解体されてから焼却されたと考えられる。この炭化材は、樹種同定の結果、アカガシ亜属に同定されている。本遺跡周辺では、小野川を挟んだ対岸に位置する堂ノ上遺跡の竪穴住居跡から出土した炭化材にアカガシ亜属、ムクロジ、クヌギ節が確認されており、当時のこの地域では暖温帯常緑広葉樹林が周囲に生育していたと推測されている。

住居は、前期と同様に西部を中心に集落を形成しているが、次第に分散し、台地先端部のやや内側に弧を描くようにして配置されていく。中央部や東部では、ともに台地の標高が高い平坦地に集中している。住居跡は、西部の9軒からなる一群、中央部やや西寄りの2軒からなる一群、中央部の北寄りの2軒からなる一群、東部の2軒からなる一群の4グループに分けられるが、グループの特徴ははっきりしていない。

出土遺物は、土師器（坏・高坏・甕・ミニチュア土器・手捏土器）、須恵器（提瓶・甗）、土製品（土玉・球状土錘・管状土錘・支脚・羽口）、石製品（白玉・双孔円板・剣形模造品）、金属製品（鉄鏃・鎌・釘）などが出土している

### (3) III期〔6世紀後葉〕

当期の住居跡は、第18・36・39・40・43・46・48・60・61・64・67・71・74・76・78・83・90・95・98・109・114・115・129・133・136・140・154・170・171・179・186号住居跡の31軒が該当する。その内訳は、大形住居7軒（第74・114・133・136・154・170・186号住居跡）、中形住居12軒（第18・39・40・46・67・78・83・90・115・129・140・171号住居跡）、小形住居12軒（第36・43・48・60・61・64・71・76・95・98・109・179号住居跡）である。最大規模の住居跡はII区の第114号住居跡で、長軸8.93mの方形である。最小規模の住居跡はIII区の第61号住居跡である。住居規模は前期を踏襲しているが、大形化の傾向が頭打ちになり、少しずつ小形化の傾向が現れている。

内部施設は、おおむね竈・支柱穴・出入口ピットを有しているが、壁溝や支柱穴が欠如している住居跡が少しずつ増加している。特に、小形住居に多く認められ、前期までの一般的な形態について、住居跡それぞれに違いが見られる。特徴的な住居跡は、第133号住居跡で、南北の支柱穴の間に補助的な柱穴を2か所有し、一辺が8.7mの大形の住居で、竈の作り替えが確認されている。

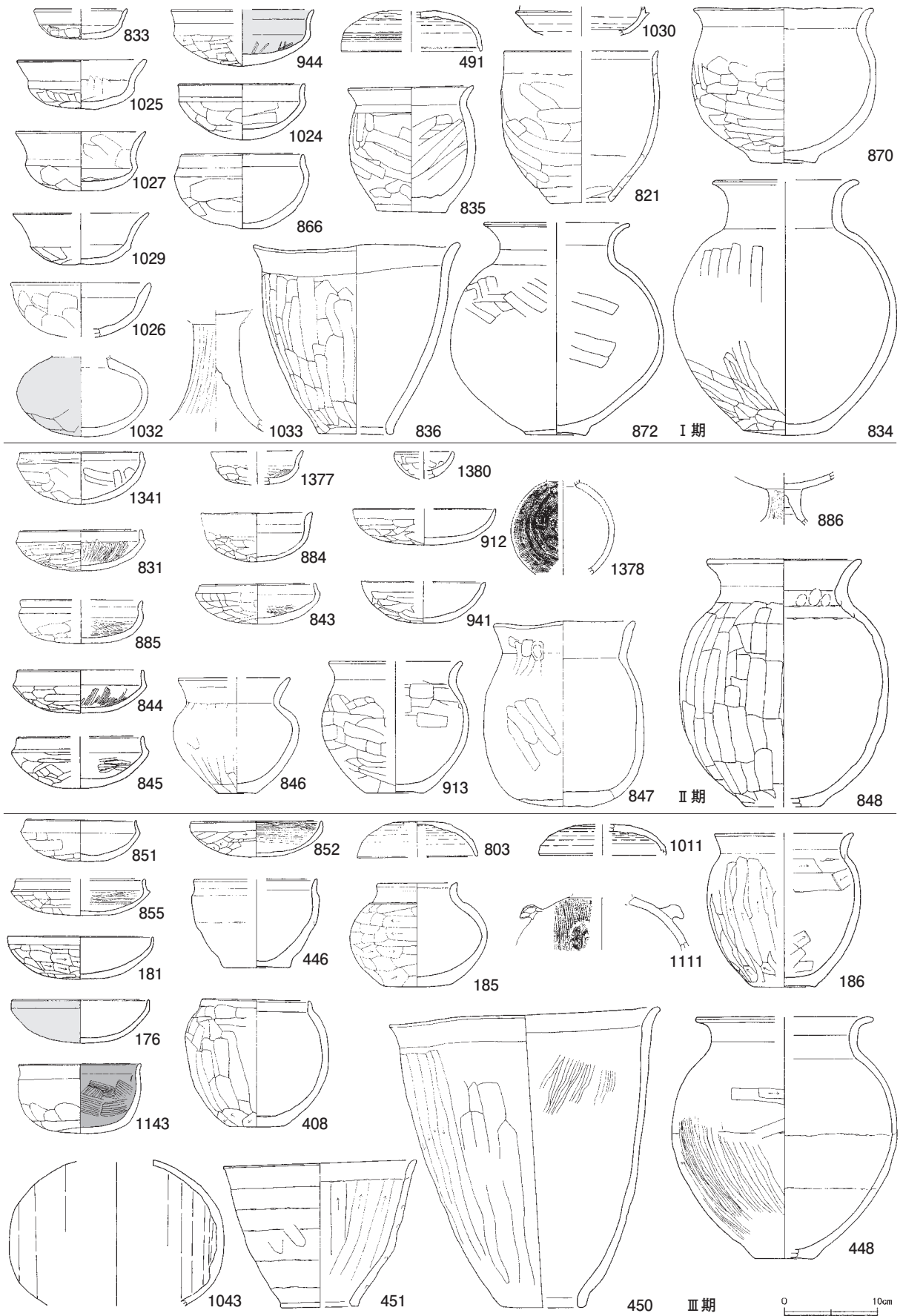
当期の集落は最盛期を迎え、前期と比べると住居跡数で2倍以上増加している。それに伴い、調査区全域にわたって集落を形成している。台地の平坦部だけでなく、斜面部へも進出しており、大きく3つのグループを形成している。西部の12軒からなる一群は、前期まで北西側と南東側に分かれていたが、当期から大きく一括りにすることができる。中央部北寄りから東寄りの7軒からなる一群は、一番標高が高い台地の平坦部に広がりを見せている。東部の11軒からなる一群は、台地中央の平坦地を東の斜面部に向かって広がっている。それぞれのグループとも、調査区域外へ広がっている可能性があり、特に第154号住居跡の南側に広がるグループがあることが推測される。

出土遺物は土師器（坏・椀・高坏・鉢・甕・甑・把手付甑・ミニチュア土器・手捏土器）、須恵器（蓋・横瓶・提瓶）土製品（勾玉・小玉・土玉・球状土錘・管状土錘・支脚・紡錘車）、石器（砥石）、石製品（白玉・双孔円板・剣形模造品）、金属製品（刀子）などである。

### (4) IV期〔7世紀前葉〕

当期の住居跡は、第13・16・37・38・49・57・66・79・82・89・92・93・96・111・127・128・135・137・144・151・153・157・159・174・175・190号住居跡の26軒が該当する。その内訳は、大形住居8軒（第13・16・38・82・111・144・157・175号住居跡）、中形住居12軒（第49・66・79・89・93・96・128・





第514图 土器変遷図 (I~III期)

135・137・153・174・190号住居跡), 小形住居5軒(第37・57・127・151・159号住居跡), 規模不明が1軒(第92号住居跡)である。最大規模の住居跡はⅡ区の第157号住居跡で, 推定長軸8.76の長方形である。最小規模の住居跡はⅡ区の第127号住居跡である。住居の規模は前期を踏襲しているが, 前期に比べ大形と中形の割合が増加し, 小形の割合が減少している。大形化の傾向が戻ったようにもみえるが, 前期の大形住居よりも当期の大形住居の方が規模は小さい。また, 当期をもって集落が一時衰退し, 7世紀後葉まで住居跡は確認されない。

内部施設は, おおむね北竈・支柱穴・出入り口ピットを有しているが, 西竈や東竈もみられ, 東竈の第137号住居跡では, 竈が出入り口施設と向かい合っていない。竈や柱穴の数など, 統一されなくなる傾向がみられる。また, 第66・93・144号住居跡では竈の作り替えが, 第151号住居跡では, 竈内から多量の灰が確認されている。

当期の集落は, 前期に比べると住居の数が減少し, 2～4軒で小グループをなす傾向が見受けられる。グループは平坦部や斜面部に一定の間隔を保持しながら位置し, 「大形住居・中形住居・小形住居」の組み合わせの違いはあるが, 大形または中形住居1軒に対し, 中形または小形住居が1～2軒の割合でグループをなしている。西部から, 台地縁辺部に位置する4軒(第66・79・82・89号住居跡), やや内陸の3軒(第92・93・96号住居跡), 中央部の北側平坦部の3軒(第111・127・128号住居跡)と2軒(第135・137号住居跡), 斜面部の3軒(第153・157・159号住居跡), 東寄りの3軒(第37・38・144号住居跡), 東部の4軒(第13・16・49・57号住居跡), 東寄り斜面部の3軒(第174・175・190号住居跡)の8グループがあり, 中央部に位置する第151号住居跡とその南側に広がるグループを想定すると9グループの存在が考えられる。

出土遺物は, 土師器(坏・高坏・鉢・甕・甌・ミニチュア土器・手捏土器・コップ形土器), 須恵器(坏・蓋・小形壺・甕), 土製品(土玉・球状土錘・管状土錘・支脚・羽口), 石器(砥石), 石製品(白玉・紡錘車), 金属製品(刀子・鉄鎌・鎌・釘・耳環)などである。

#### (5) 古墳時代の概観

以上が古墳時代の様相であるが, 概観してみると以下のような傾向が認められる。

集落が成立するⅠ期には, 当遺跡の西部・西部から中央部・東部に3つのグループが出現する。北西部では台地の縁辺部に重複の激しい地区が確認できる。西部から中央部にかけては台地の平坦部にやや離れて位置している。東部では中央部の平坦部に重複せずに位置している。この2軒は東部グループの初現とも考えられる。

Ⅱ期になると, 西部から中央部にかけて同じような分布状況であるが, 東部については一時的に姿を消し, より東側の平坦地に移動している。4つのグループが考えられる。

最盛期のⅢ期になると, 西部のグループは一時的に合流または居住範囲が接するほど近寄り, 中央部のグループは前期よりも拡大している。また, 集落が東部へ広がっていくのが明確になる。

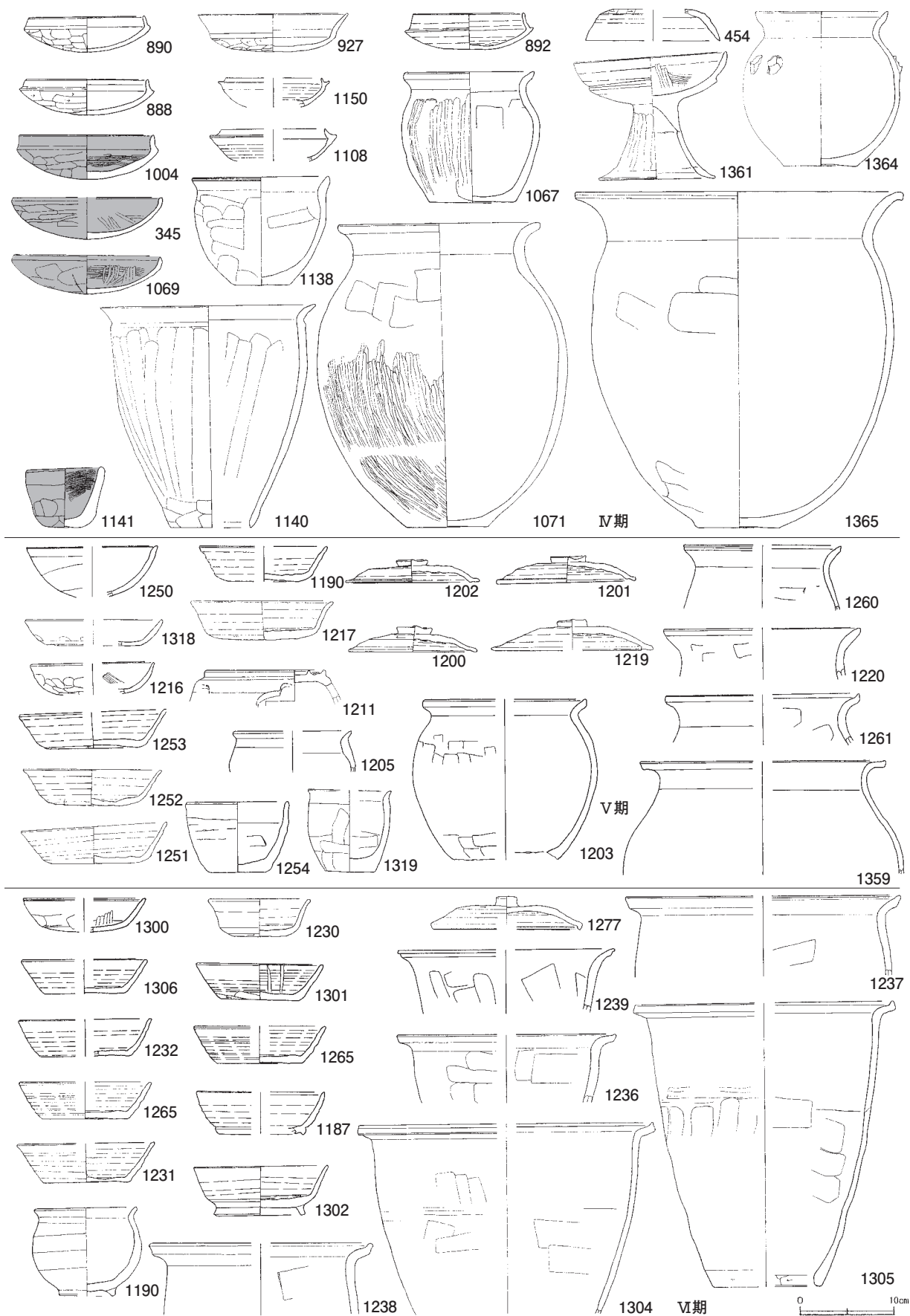
Ⅳ期になると, 各地区のグループ化が進み, 2～4軒からなる小グループが散在している。また, 台地の平坦部を中心に構築されていた住居が, 斜面部まで進出していく。この期の後, 集落は一時姿を消し, 他の地域に移動したことが考えられる。

内部施設については, 一時期の一部の住居跡に例外(貯蔵穴の設置・竈の作り替え・壁溝の有無)は認められるが, おおむね竈・支柱穴・出入り口ピットといった内部施設を備えた住居跡が多数を占めている。

遺物については, Ⅱ期の住居数の減少による遺物数の減少はあるが, 器種構成にあまり変化は見られない。



第515図 集落変遷図 (7世紀)



第516图 土器変遷図 (IV~VI期)

須恵器の所有率が多少増加する程度である。手法の変化としては、Ⅲ期から土師器坏に黒色処理が始まること、内面の磨きが徐々に増えていくことがあげられる。

当時代の薬師後遺跡は、6世紀前葉から20軒弱の住居数で形成された集落が、規模を拡大させながら、6世紀後葉から7世紀前葉までを最盛期としている。各グループの特徴に明確な差を確認できなかったことから、これらのグループは住居それぞれの違いがあまりみられない、統一性を重視する集団であったと想定される。

## 5 奈良・平安時代の様相（第516～521図）

ここでは、遺構に伴う出土遺物を中心に時期を判断し、それをもとに当時期を10期に細分した。時期は古墳時代から通してⅤ期とし、それぞれの時期の様相について記述する。

### (1) Ⅴ期〔8世紀前葉〕

当期の住居跡は、第8・12・19・117・120・130・162号住居跡の7軒が該当する。住居跡は大形のもの第8・117・120・130号住居跡の4軒、中形のもの第12・19号住居跡の2軒、小形のもの第162号住居跡の1軒で、大形が主体であり、平面形はいずれも方形である。

内部施設は、北壁中央部に竈が付設されている住居跡が6軒、北西壁中央部が1軒で、北竈が主体である。柱穴については、主柱穴が4か所と出入り施設に伴うピットが確認できたものは3軒、主柱穴が4か所確認あるいは推定できるものは2軒、出入り口施設に伴うピットが確認できたものは1軒、柱穴が1か所も確認できなかったのは第162号住居跡1軒だけで、古墳時代に比べ柱穴がない住居跡の割合が高くなっている。また、壁溝が確認されたのは3軒である。特徴的な住居跡としては、斜面部に位置している第162号住居跡で、竈が設置されていないことから、他の住居跡とは異なる性格を有すると思われる。また、第120・130号住居跡は壁柱穴を有している。特に、第130号住居跡は南壁に張出部を有する住居で、当遺跡では後述する第116号住居跡（Ⅵ期）と2例が確認されている。ともに大形住居で、隣接していることから、同時期の集落の中で中心的な役割を有している住居と考えられる。

当期の集落は、中央部の北側平坦部と東部の南側平坦部に位置する2グループに分けられる。どちらも大形住居を中心とした3軒からなっている。

出土した土器の様相は、土師器の坏は古墳時代のいわゆる「鬼高式」系譜の丸底のものが主体である。甕類は、口縁部を軽くつまみ上げる傾向が現れている資料も若干みられ、底部に木葉痕が認められるものがある。須恵器の坏は器高が低く、体部下端が丸みを帯びているものが多い。大きさには大・中・小・極小の4種が存在している。底部の調整は手持ちヘラ削りだけで、回転ヘラ削りが施されたものは確認できない。二次底部のある坏の底部周縁の調整は回転ヘラ削り、二次底部のない坏の体部下端の調整は手持ちヘラ削りがそれぞれ施されている。蓋は、伏せ皿形を呈し、口縁端部にかえりが付くものが多く、ボタン状のつまみを貼り付けている。甕・甔類は、器形や成形・調整などの手法が分かる良好な資料は出土していない。特筆される遺物として、文字は判読できないが体部外面に刻書のある須恵器坏（第12号住居跡）が出土している。また、手捏土器のように底部に木葉痕が認められる土師器坏（第12号住居跡）も注目される。これは、古墳時代と同じように、祭祀行為が当期まで継続していたことを物語るものと思われる。また、釣り鐘形の透かしを有している円面硯（第117号住居跡）が出土している。これは、一般集落への文字の普及や、この集落内に文字を書ける人が居住していたことを物語るものと思われる。

### (2) Ⅵ期〔8世紀中葉〕



当期の住居跡は、第23・108・116・121・123・138・141・145・158・160号住居跡の10軒が該当する。住居跡は大形のもの第116号住居跡の1軒、中形のもの第108・121・145号住居跡の3軒、小形のもの第23・123・138・141・158・160号住居跡の6軒で、前期に比べ小形化の傾向が著しい。また、平面形は1軒を除いて、いずれも方形で、第23号住居跡は主軸線のほうが短い長方形である。

内部施設は、北壁中央部に竈が付設されているものが7軒で、北東壁中央部に付設されているものは1軒、東壁に付設されているものは2軒である。主軸方向は、西に振れているものよりも、東に振れているものが多くなり、東竈の割合が高まっている。また、支柱穴4か所と出入り施設に伴うピットが確認できたものは第116・121号住居跡の2軒で、柱穴が1か所も確認できなかったのは第123・138・141・158号住居跡の4軒である。前期から柱穴が内部に確認できる住居跡が減少傾向にある。反面、第108・116・121・141・145号住居跡は壁溝を有し、前期より増加している。特徴的な住居跡としては、第116号住居跡が張出部と壁柱穴を有しており、前期の様相を受け継いでいる。また、詳細な時期は不明であるが、規模や竈の向きがほぼ同じ第142号住居跡も同時期の可能性が高い。

当期の集落は、中央部を中心に形成されていたと考えられる。住居跡は平坦部や斜面部に一定の間隔を保って立地し、小形から中形で方形のものが主体である。2～3軒でグループを形成している可能性があるが、はっきりとした特徴は確認できない。この期を最後に大形の住居は中央部から姿を消していく。また、第108号住居跡の南側調査区外に広がるグループとの関連が推測される。

出土した土器の様相は、土師器の坏は一部残っているが、基本的には器種構成の中から次第に消滅していく。甕類は、口縁部のつまみ上げが少しずつ進んでいるが、体部はまだ丸みを持っており、底部に木葉痕が認められる。須恵器の坏は器高が低く、体部下端に丸みを帯びずに箱形に開くものが多い。大きさは中・小の2種が存在しているが、大と極小は認められない。底部の調整は回転ヘラ削りである。また、有台器種である高台付坏が出現する。蓋は、伏せ皿形を呈し、口縁端部を短く折り返すものが主体で、扁平な擬宝珠状のつまみを貼り付けている。甕・甔類は、器形や成形・調整などの手法が分かる良好な資料は出土していない。特筆される遺物として、東海系の須恵器高台付坏（第116号住居跡）が出土している。

### (3) VII期〔8世紀後葉〕

当期の住居跡は、第33・51・126・161・165・182号住居跡の6軒が該当する。住居跡は大形のもの第182号住居跡の1軒、中形のもの第51・126・161号住居跡の3軒、小形のもの第33・165号住居跡の2軒で、前期に比べると小形住居の割合が減少し、大形・中形住居が増加している。平面形は方形が3軒、長方形が2軒、主軸線のほうが短い長方形は1軒で、小形住居はいずれも方形である。

内部施設は、北壁に竈が付設されているものが3軒、東壁に付設されているものは2軒、確認できなかったものは1軒である。主軸方向は、前期と同様に、東に振れているものが多くなり、東竈の割合が高い。また、支柱となる4か所や、出入り口施設に伴うピットが確認できたものは3軒で、壁溝が確認されたのは2軒である。

当期の集落は、前期と比べると中央部の住居が減少し、次第に東へ移動している。住居跡は平坦部や斜面部に広がっているが、集中しておらず、グループ化の傾向は前期に比べ薄らいでいる。中央部北側調査区域外に集落が広がる可能性もある。

出土した土器の様相は、土師器の坏は内面にヘラ磨きが施されているものが少量存在している。甕類は前期よりも少し丸みがとれ、長胴化の兆しが見え始める。中位以下にヘラ磨きが施されているもののみられる。須恵器の坏は体部が直線的に立ち上がるものが主体となり、口縁端部が少し外反している。大きさ



第517図 集落変遷図 (8世紀)

は中・小の2種だけとなる。底部及び体部下端には、回転ヘラ削りと手持ちヘラ削りが施されている。また、高台付坏は、中・小2つの大きさが存在している。蓋は、全容が分かる良好な資料が出土していないが、断面逆台形つまみを貼り付けている。鉢は横位の平行叩きによる調整がみられ、甗は縦位の平行叩きによる調整を主体とし、体部下端には横位のヘラ削りが認められる。甕類も同様の調整と思われる。東海地方産の須恵器（第33号住居跡）は、いわゆる「壺G」と呼ばれるタイプのもので、搬入品と思われる。また、灰釉陶器は猿投折戸10号窯段階の短頸壺（第51号住居跡）が共伴しており、実年代を与える上での参考資料となる。特筆される遺物として、須恵器坏の転用硯（第51号住居跡）が出土している。

#### (4) Ⅷ期〔9世紀前葉〕

当期の住居跡は、第7・20・28・58・119・147・177・189号住居跡の8軒が該当する。住居跡は大形のもので第177号住居跡の1軒、中形のもので第7・20・28・58・189号住居跡の5軒、小形のもので第119・147号住居跡の2軒で、前期に比べると大形・小形住居が減少し、中形住居が増加している。規模の統一化の傾向が見られる。平面形は方形が5軒、主軸線のほうが長い長方形のものが3軒で、前期の様相と異なっている。小形住居は前期と同様にいずれも方形である。

内部施設は、確認できなかった住居跡1軒以外は北壁に竈が付設されており、主軸方向は北または西に振れているものが5軒、東に振れているものが3軒で、前期に比べて東竈の割合が低い。支柱穴が4か所と入り口施設に伴うピットが確認できたものは5軒、壁溝が確認されたのは5軒である。規模と同様に、前期に比べて統一される傾向がみられる。

当期の集落は3つのグループに分けられ、中央部平坦地の2軒からなる一群、東部中央の平坦地の4軒からなる一群、東部の台地先端の2軒からなる一群が確認できる。ただ、調査区域外との際近くに位置している住居跡については、調査区域外に所属グループが広がっている可能性がある。

なお、9世紀代と考えられる大形の竪穴状遺構1基が中央部北側の平坦地に確認されている。形状は漏斗状で、覆土中層と底面に焼土と炭化物が含まれている。底面中央部には小ピット状の掘り込みを有しており、覆土の珪藻分析の結果から、氷室として機能していた可能性がある。9世紀代にピークを迎えた、当集落構造を考える上でも貴重である。

出土した土器の様相は、ロクロで成形された土師器の坏・高台付碗がわずかに出土している。高台付碗はロクロ成形で、内面にヘラ磨きが施されている。甕は、いわゆる「常総型甕」と呼ばれる口縁端部をつまみ上げているものを主体とし、体部下半には縦位のヘラ磨きと横位のヘラ削りのどちらかが施されている。それに対し、小形甕の体部下位には横位のヘラ削りが施されており、縦位のヘラ磨きは確認できない。これらの甕類は、底部に木葉痕が認められるものと、ヘラ削り調整が施されているものがある。須恵器の坏は、前段階のものに比べて器高が高く、底径が小さくなる傾向が認められる。大きさは基本的に小のものが中心となるが、極小の坏が少量存在している。底部及び体部下端には、いずれも手持ちヘラ削りが施されているが、回転ヘラ削りが施されたものも少量存在している。高台付坏は、坏と同じように小の大きさだけとなる。蓋は、伏せ皿形を呈し、口縁端部を短く折り返しているものが主体で、一部に笠形を呈するものも存在する。つまみは扁平な擬宝珠状のものと、断面逆台形のものがある。鉢・甕は、横位の平行叩きを主体とし、体部下端には横位のヘラ削りが施されている。その他にも、盤・高盤・小形短頸壺・円面硯が器種構成の中に一定量存在している。また、灰釉陶器は猿投井ヶ谷78号窯段階の長頸瓶（第7・20号住居跡）が共伴しており、実年代を与える上での参考資料となる。特筆される遺物として、底部外面に「十」と朱書された須恵器坏（第20号住居跡）、文字は判読できないが底部外面にヘラ書きのある須恵



器坏（第7号住居跡）が出土している。また、当期に属する墨書土器は出土していないが、円面硯が同一住居跡（第28号住居跡）内から2点出土している。その他、須恵器坏の底部外面に「二」（第7・189号住居跡）のヘラ書きが確認できるものが出土しているが、これは文字というよりもヘラ記号と思われる。油煙の付着した土師器小坏（第28号住居跡）、須恵器坏（第7号住居跡）の出土も注目される。これらの遺物は、「仏」に対して灯明を上げるために使用されたものと考えられ、一般集落への仏教信仰の浸透を物語っていると思われる。また、「真」という文字が刻まれた石製の紡錘車（第715号土坑）は、実用的なものではなく、絹織物などの布生産に対する信仰や祭祀儀礼に使用されたものと考えられる。

(5) IX期〔9世紀中葉〕

当期の住居跡は、第1・2・9・11・17・26・30・45・53・146・152・173・176号住居跡の13軒が該当する。住居跡は大形のものが第2・173・176号住居跡の3軒、中形のものが第152号住居跡の1軒、小形のものが第1・9・11・17・26・30・45・53・146号住居跡の9軒で、前期に比べると中形住居が減少し、大形・小形住居が増加している。特に、いっそうの小形化の傾向がみられる。平面形は方形が7軒、方形または長方形のものが1軒、主軸線のほうが短い長方形のものが4軒で、主軸線のほうが長い長方形のものが1軒で、前期の様相と異なっている。特に、主軸線のほうが短い長方形の住居跡が増加しており、この住居跡は、その存在を確認できなかったが、竈の両脇にいわゆる「棚状施設」を有していた可能性が考えられる。

内部施設は、ほとんどが北壁や北西壁に竈が付設された北竈であるが、第1号住居跡では西壁中央部に付設されている西竈が確認されている。前期に多かった東竈は確認できなかった。また、第173号住居跡は北コーナー部に付設されたコーナー竈である。コーナー部に竈を有するものは全時期を通して1軒である。支柱穴や入り口施設に伴うピットが確認できたものは7軒、壁溝が確認されたのは3軒である。柱穴と溝跡を確認できなかった住居跡は6軒であり、前期に比べ統一の傾向が薄らいでいる。

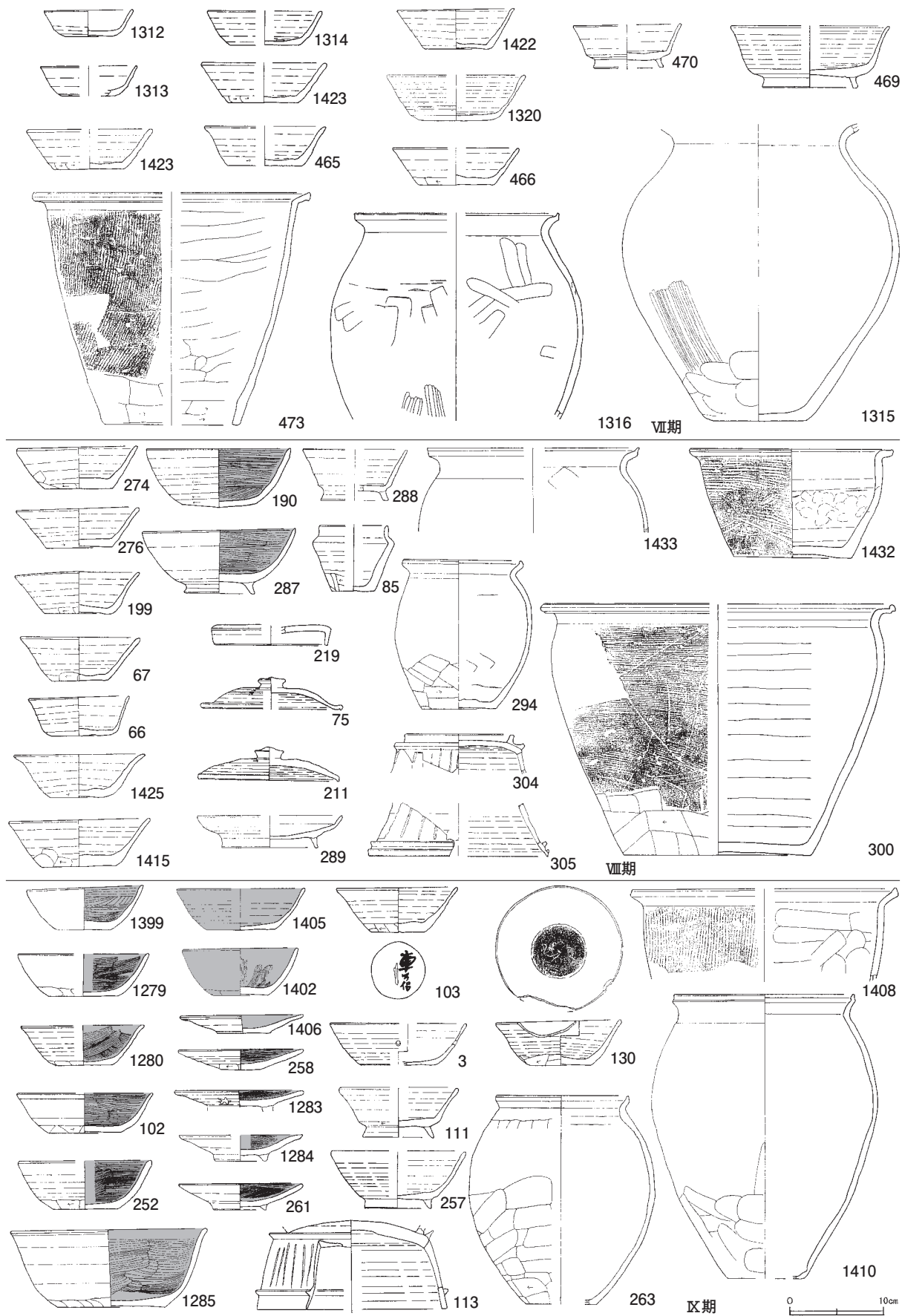
次に、掘立柱建物跡は第1・7・8号掘立柱建物跡の3棟が該当する。第1・8号掘立柱建物跡は3×2間の中形側柱建物、第7号掘立柱建物跡は2×2間の小形総柱建物である。桁行方向はいずれも西に振られている南北棟で、すべてN-19～20°-Wの範囲で並んでいる。奈良時代以降見られた中形・大形住居が少なくなっていくことと、掘立柱建物が出現していくことは連動していたものと考えられ、当期の集落を構成する建物群は、「竪穴住居」と「居宅としての掘立柱建物」と「倉庫としての掘立柱建物」に移行している。

当期の集落は、奈良・平安時代の中で最盛期を迎えるとともに、集落が当遺跡の東部に移動し終わったことが分かる。遺構は中央部の2軒からなる一群と、東部の住居跡11軒と掘立柱建物跡3棟からなる一群の2グループに分けられるが、当期の集落の中心は東部のグループである。東部の遺構は、大形の住居跡（第2・173・176号住居跡）と小形住居跡、掘立柱建物跡が一つの単位となり、一定の間隔を保ちながら東西方向にほぼ一列で並んでいる可能性がある。

出土した土器の様相は、土師器の坏はロクロで成形されたもので、基本的な調整は内面に横位のヘラ磨きが施され、黒色処理されている。また、新しく土師器皿及び高台付皿が出現する。坏と同じようにロクロにより成形されたもので、基本的な調整は内面に横位のヘラ磨きが施され、黒色処理されている。甕は、前段階と同じ「常総型甕」であるが、体部下位に横位のヘラ削りが施されたものが主体で、縦位のヘラ磨きが施されたものは少量しか確認できない。底部はヘラ削りされたものが主体で、木葉痕が残るものは少量になる。須恵器の坏は、前段階のものに比べてさらに器高が高く、底径が小さくなる。大きさは小だけ



第518図 集落変遷図 (9世紀)



第519图 土器変遷図（Ⅶ～Ⅸ期）

となり、極小の坏は消滅する。底部及び体部下端の調整は、いずれも手持ちヘラ削りが主体で、回転ヘラ削りはほとんどない。さらに、体部下端の手持ちヘラ削りの幅は、広くなる傾向が認められる。鉢・甕・甌は、縦位の平行叩きを主体とし、体部下端には横位のヘラ削りが施されている。高台付坏・盤・蓋・円面硯は器種構成の中に一定量存在しているが、高盤・小形短頸壺は消滅している。また、灰釉陶器は当期の遺構からは出土していない。当期よりも古い時代の混入品である、猿投折戸10号窯段階の須恵器双耳瓶（第1号掘立柱建物跡）が出土しており、注目される。特筆される遺物として、底部内面に鳥の絵がヘラで描かれた須恵器坏（第11号住居跡）が挙げられる。絵の内容については、2羽の鳥が描かれているが、2羽とも尾羽が上を向いていることから、脚の短い水鳥を表現した可能性が高い。さらに、左側の鳥の脚のように見えるものは何を表現したものなのかが問題になるが、鳥類の脚は関節の構造上、坏に描かれた絵のように曲げることができないことから、脚を表現したものではなく、一番最初に描いた1羽目の鳥の描き残しか、もしくは一番最後に描こうとした3羽目の鳥の描き損じで、それを消さずに残したまま焼成したものと考えるのが妥当と思われる<sup>1)</sup>。このように鳥の絵が描かれた古代の土器としては、つくば市鳥名熊の山遺跡出土の土師器坏、鹿嶋市片野遺跡出土の土師器甕があるが、須恵器に描かれたものは管見では県内初の資料である。また、底部外面に「車万侶」と墨書された須恵器坏（第9号住居跡）の出土も注目される。これは、銘々具としての器の所有者名と考えられる。その他にも前段階と同じように須恵器坏の底部外面に「一」（第2・9号住居跡から2点ずつ、計4点）、須恵器盤の底部外面に「二」（第53号住居跡）のヘラ書きがそれぞれ確認できるが、これはやはり文字というよりもヘラ記号と思われる。また、「大」の文字が体部にヘラ書きされた土師器高台付皿（第146号住居跡）や円面硯（第9号住居跡）の出土も注目される。

(6) X期〔9世紀後葉〕

当期の住居跡は、第3・5・10・24・25・32・41・47・52・148・149・167・168・178号住居跡の14軒が該当する。住居跡は中形のもの第5・41・148・149・167・168・178号住居跡の7軒、小形のもの第3・10・24・25・32・47・52号住居跡の7軒で、大形住居が姿を消し、中形住居が増加している。小形化の傾向は一時みられなくなる。平面形は方形が6軒、方形または長方形のもの3軒、主軸線のほうが短い長方形のもの2軒、主軸線のほうが長い長方形のもの3軒で、前期の様相と異なっている。

内部施設は、北壁や北西壁に竈が付設された北竈の住居跡が9軒、東壁中央部に付設されている東竈のものが3軒である。前期になかった東竈が再び確認されている。支柱穴や入り口施設に伴うピットが確認できたものは9軒、壁溝が確認されたのは5軒である。柱穴と溝跡を確認できなかった住居跡は2軒であり、前期からさらに統一性がなくなっている。

掘立柱建物跡は、第6・9・11号掘立柱建物跡の3棟が該当する。第6号掘立柱建物跡は4×3間の中形側柱建物、第9号掘立柱建物跡は3×2間の中形側柱建物、第11号掘立柱建物跡は3×2間の身舎に東庇が付く小形総柱建物である。桁行方向はいずれも西に振れている南北棟で、すべてN-16～18°-Wの範囲で並んでいる。当期の集落を構成する建物群は、前期と同様である。

当期の集落は、前期と同様に、奈良・平安時代の中で最盛期を迎えている。遺構は中央部南側の2軒からなる一群と、東部中央の住居跡4軒からなる一群、東部北側の掘立柱建物跡3棟と住居跡5軒からなる一群、東部の台地先端部寄りの3軒からなる一群の5グループに分けられる。前期より住居跡が集中しており、小グループ化している。

出土した土器の様相は、前段階と同じく土師器坏は、ロクロで成形されたもので、底部の切り離し技法



は、ほとんどが回転糸切りで、回転ヘラ切りは少量である。基本的な調整は内面に横位のヘラ磨きが施され、黒色処理されているが、内面調整を省略したものも出現する。新たに出現したロクロ成形の土師器坏の一群は、底部及び体部下半に手持ちヘラ削り調整が施されているため、製作技法上は須恵器坏との差異があまり認められない。焼成も酸化炎焼成であるため、焼成が還元炎ではない須恵器（焼成が良好ではない須恵器）、つまり酸化炎焼成の須恵器との差異があまり認められない。しかし、長石・石英・針状鉱物・赤色粒子を微量含んでいるが、含有物があまり目立たない粒のそろった胎土を使用しているところが須恵器とは明らかに違い、この点を土師器と須恵器を分ける指標とした。有台器種としては、前段階に出現した高台付皿のほか、高台付椀も出現する。これらの有台器種は、須恵器の盤や高台付坏を模倣したものというよりも、灰釉陶器の高台付皿や高台付椀を模倣することによって、新たに登場した器種と考えるべきものと思われる。高台付椀、皿及び高台付皿、鉢は、坏と同じようにロクロで成形されたもので、基本的な調整は内面に横位のヘラ磨きが施され、黒色処理されている。甕は、前段階と同じ「常総型甕」であるが、器形的には長胴化が進んでいる。体部下位には横位のヘラ削りが施されたものが主体で、縦位のヘラ磨きが施されたものは少量しか確認できない。底部に木葉痕が残るものは一部を除き確認できない。須恵器の坏は、前段階のものに比べてさらに底径が小さくなる傾向が認められ、椀形を呈するようになる。底部の切り離し技法が確認できるものは少ないが、回転ヘラ切りと回転糸切りがあると思われる。底部及び体部下端には、手持ちヘラ削りが施されているが、回転ヘラ削りが施されたものも少量存在している。前段階で確認できた高台付坏・盤・蓋は、わずかに器種構成の中に残っている。鉢・甕・甑は、縦位の平行叩きを主体とし、体部下端には横位のヘラ削りが施されているが、鉢の中には平行叩きの後、それをナデ消しているものもある。また、灰釉陶器は猿投黒笹90号窯段階の長頸瓶（第5号住居跡）、広口壺（第47号住居跡）が相伴しており、実年代を与える上での参考資料となる。

(7) XI期〔10世紀前葉〕

当期の住居跡は、第15・29・42・44・124・125号住居跡の6軒が該当する。住居跡はすべて小形のもので、大形・中形住居が姿を消し、小形化がさらに進んでいる。平面形は方形が4軒、主軸線のほうが短い長方形のものが2軒である。

内部施設は、北壁や北西壁に竈が付設された北竈の住居跡が4軒、東壁に付設されている東竈のものが1軒、竈が付設されていないものが1軒である。主柱穴を有するものはなく、住居の小形化に伴って、上屋を支える主柱の数も減少する傾向が認められる。出入口口施設に伴うピットを有するものは4軒、壁溝はいずれの住居跡でも確認できた。また、第124号住居跡は、中央部に位置する柱穴の硬化した確認面に鉄分が付着し、中から鉄滓が出土していることから、製鉄関連の性格を持つ特殊な遺構と考えられる。

掘立柱建物跡は、第2・3・4・10・12・15・16・17号掘立柱建物跡の8棟で、第2号掘立柱建物跡が5×2間の大形側柱建物、第17号掘立柱建物跡が4×3間の中形側柱建物、第3・12号掘立柱建物跡が3×2間の中形側柱建物、第10号掘立柱建物跡が3×1間の小形側柱建物である。桁行方向は第12号掘立柱建物跡以外はいずれも西に振れている南北棟で、N-14～15°-WあるいはN-21～24°-Wの範囲で並んでいる。第12号掘立柱建物跡は、このN-15°-Wから直角に振れているN-75°-Eの桁行方向を有する東西棟である。

当期の集落を構成する建物群は、引き続き住居も存在しているが、居宅としての掘立柱建物と倉庫としての掘立柱建物が最も多く建てられている。遺構の構成は、「竪穴建物（住居）+掘立柱建物（倉庫）」、「掘立柱建物（居宅）+掘立柱建物（倉庫）」、「竪穴建物（住居）だけで倉庫を伴わない」という3つの組み

合わせが成り立つと思われる。

出土した土器の様相は、土師器坏は、すべてロクロで成形されたもので、底部の切り離し技法は、ほとんどが回転糸切りである。底部及び体部下端や内面の調整には、その有無を含めていくつかの手法的差異が認められ、それらの組み合わせによって分類が可能である。皿や有台器種である高台付椀及び高台付皿も、坏と同じように底部及び体部下端や、内面の調整には、その有無を含めていくつかの手法的差異が認められる。甕は、口縁端部をつまみ上げたものが主体で、形態的には長胴化した「常総型甕」といえるが、体部下位に縦位のヘラ磨きは見られず、横位のヘラ削りを基本としている。また、体部外面に平行叩きを施した後、それをナデ消しているものもある。底部に木葉痕が残るものは一部を除き確認できない。口縁端部をつまみ上げず、面取りをしたような角張った単口縁のものも見られるようになる。須恵器の供膳具は、器種構成の中から消滅している。鉢・甕・甌も一部残っているが、基本的には姿を消している。また、灰釉陶器は猿投黒笹90号窯段階の椀（第15号住居跡）、長頸瓶（第15・44号住居跡）が相伴しており、実年代を与える上での参考資料となる。

(8) XII期〔10世紀中葉〕

当期の住居跡は、第4・21号住居跡の2軒が該当する。住居跡はどちらも小形で、平面形は方形である。主軸方向はどちらも西に振れているが、第4号住居跡の竈が北壁中央部に付設位置されているのに対し、第21号住居跡は中央部付近に炉が付設されている。これは、竈に代わる燃焼施設として置き竈あるいは囲い炉的な上部構造を伴う炉を採用していたものと思われる。

次に、掘立柱建物跡は第5・13・14号掘立柱建物跡の3棟が該当する。第5号掘立柱建物跡が5×3間の大形側柱建物、第13号掘立柱建物跡が5×3間の中形側柱建物、第14号掘立柱建物跡が3×2間の小形側柱建物である。桁行方向はいずれも西に振れている南北棟で、すべてN-18°-19°-Wの範囲で並んでいる。

当期の集落を構成する建物群は、引き続き竪穴住居と居宅としての掘立柱建物、倉庫としての掘立柱建物で、特に第5号掘立柱建物跡は床面積52.7㎡と全時期を通して最大規模である。前期と比べると、竪穴住居から掘立柱建物が主要な建物になり、居宅や倉庫としての役割を担うようになったと思われる。

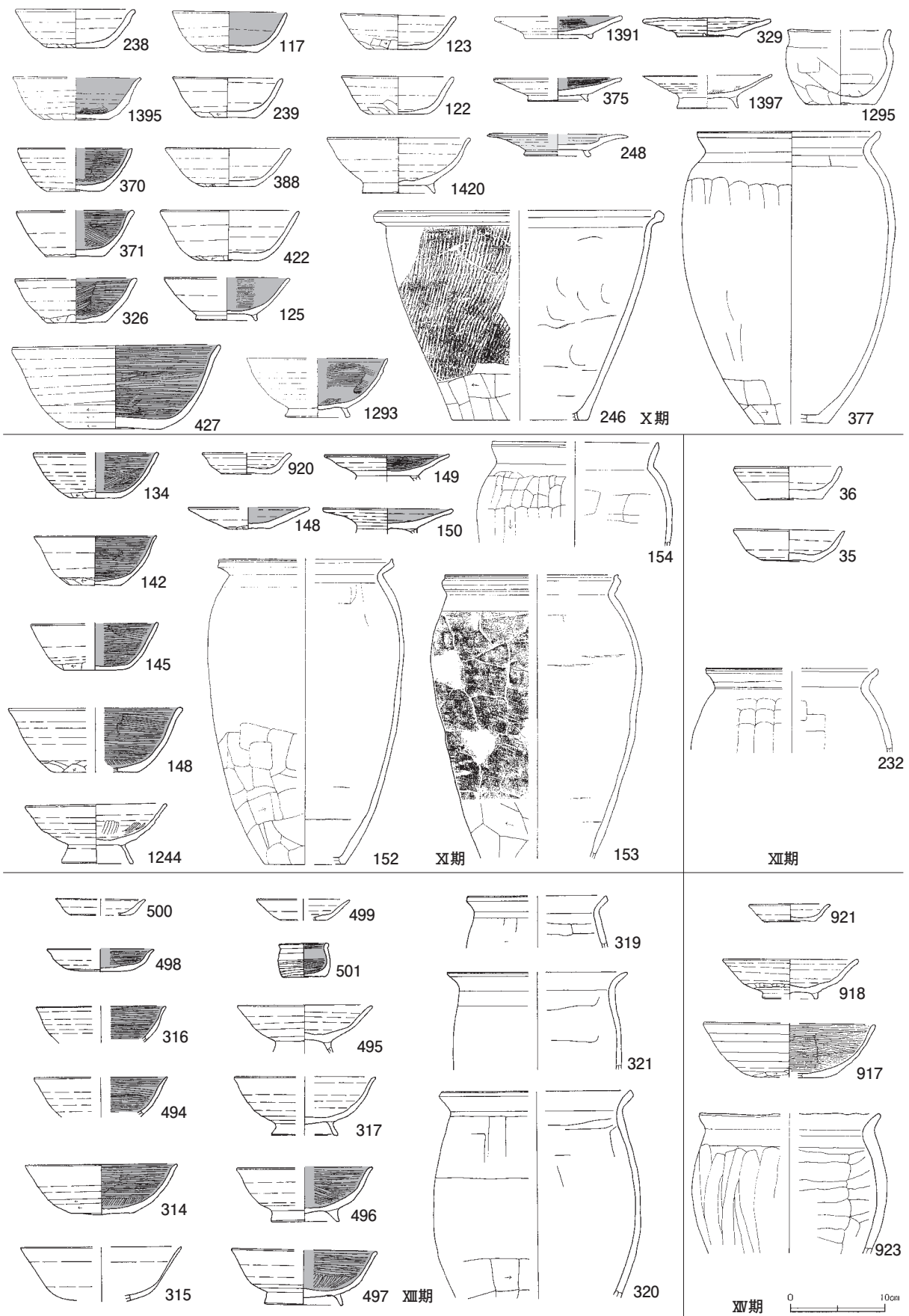
出土した土器の様相は、土師器坏は、すべてロクロで成形されたもので、底部の切り離し技法は、ほとんどが回転糸切りである。前段階と同じように、底部及び体部下端や内面の調整には、その有無を含めていくつかの手法的差異が認められる。皿は、前段階までの系譜を受け継ぐ器形のものも消滅し、新たに底部から短く体部が立ち上がる器形のものも出現している。有台器種も高台付皿が消滅し、高台付椀だけとなる。また、供膳具全体として、切り離し後の底部や、体部下端及び内面が未調整のもの割合が増えてくる。さらに、内面黒色処理を施さないもの割合も増えている。甕は、全容が分かる良好な資料がないが、口縁端部をつまみ上げた「常総型甕」の系譜を受け継ぐものも残っている。また、灰釉陶器は猿投折戸53号窯段階と考えられるが、当期の遺構からは出土していない。特筆される遺物として、底部外面に「西」と墨書された土師器坏（第14号掘立柱建物跡）が出土しており、その出土状況から建物の地鎮具として納入されたものと考えられる。

(9) XIII期〔10世紀後葉〕

当期の住居跡は、第6・27・31・34・55・72・99号住居跡の7軒が該当する。住居跡は小形のものが第27・31・34・72・99号住居跡の5軒、中形のものが第6・55号住居跡の2軒で、中形のものが再び姿を現す。平面形は方形のものが6軒、主軸線のほうが短い長方形のものが1軒である。



第520図 集落変遷図 (10・11世紀)



第521图 土器変遷図 (X~XIV期)



内部施設は、すべてが東壁あるいは北東壁に竈を有する東竈である。主柱穴が確認できたものではなく、前期と同様に主柱の数は減少している。出入り口施設に伴うピットが確認できたものは5軒で、壁溝が確認されたものは3軒である。

当期の集落を構成する建物群としては、掘立柱建物が姿を消し、再び竪穴住居だけとなる。当期になって初めて、西部に住居跡が現れる。東部の住居群はまとまった1つのグループで、規則性を持った集団と考えられる。

出土した土器の様相は、土師器は出土量そのものが減る傾向にある。それとは逆に、前段階で新たに出現した底部から短く体部が立ち上がる器形の皿、あるいは同じ器形で小皿の出土量が増える傾向にある。この坏・皿類の底部の切り離し技法は回転ヘラ切りで、その後は無調整のことが多い。高台付椀は、灰釉陶器模倣の系譜を引くもの以外に、灰釉陶器に祖形が求められないいわゆる「足高高台付椀」と呼ばれる高い高台を有するものが出現している。甕は、全容が分かる良好な資料がないが、口縁端部をつまみ上げた、あるいはつまみ出した「常総型甕」の系譜を受け継ぐものもまだ一部に残存しているが、口縁端部をつまみ上げずに面取りしたような角張った単口縁のものや、口縁端部に丸みをもたせた単口縁のものが主体となる。その他、小壺・小甕が1点ずつ出土している。また、灰釉陶器は猿投東山72号窯段階と考えられるが、当期の遺構からは出土していない。特筆される遺物として、置き竈（第99号住居跡）が出土しており、注目される。

#### (10) XIV期〔11世紀前葉〕

この時期の住居跡は、西部の舌状台地の先端部付近に立地しているに位置している、第87号住居跡の1軒が該当する。小形で、平面形は方形である。主軸方向は東に振れている。竈が付設された位置は、北東壁中央部と南東壁中央部の2か所で、両方とも明確な袖部を確認することができなかった。このような竈は、置き竈あるいは囲い炉的な上部構造を伴う燃焼施設であった可能性も考えられる。主柱穴ばかりでなく、出入り口施設に伴うピットも確認できなかった。

出土した土器の様相は、器種構成は、土師器坏、高台付椀、小皿及び甕である。前段階までみられた供膳具の内面黒色処理は認められない。小皿の底部の切り離し技法はすべて回転糸切りで、体部が直線的に立ち上がってそのまま口縁部に至るなど、前段階とは器形の特徴も異なっている。調整はすべて行われていない。こうした器形や、成形及び調整の手法の特徴は、12世紀後葉に出現すると思われるいわゆる「ロクロかわらけ」あるいは「平底かわらけ」の古い様相に近い雰囲気をもっており、ここにその祖形が求められる可能性がある。高台付椀は低い高台を有するもので、灰釉陶器模倣の系譜を引くものとも、いわゆる「足高高台付椀」とも違い、木器にその祖形があると思われる。甕は、端部を面取りしたような角張った単口縁のものや、端部に丸みをもたせた単口縁のものだけになる。

#### (11) 奈良・平安時代の概観

これまで、奈良・平安時代の集落の様相をみてきたが、遺構の分布状況を振り返ると、次のような変遷が明らかになる。

8世紀の遺構は、中央部から東部に展開している。当遺跡が立地する舌状台地の東側先端部付近から中央部の台地平坦部を中心に、次第に斜面部まで広がりを見せている。古墳時代に占地していた西部への広がりは見られない。中央部から東部の北側調査区域以外も含めて、舌状台地の東側に占地していたと考えられる。

9世紀の遺構は、西部を除いた区域に展開しているが、中央部中央から東部への移動が促進されている。

中央部で、斜面部まで占めていた遺構は台地平坦部の西側に戻り、小さな集団をなしている。東部では舌状台地の中央付近を占めている。8世紀と比べてみると、中央部から東部へと、東への移動が一層進んでいる。竪穴住居跡のほかに掘立柱建物跡が集落を構成する建物群に加わるなど、遺構密度も濃くなる。

10世紀の遺構は数が減少し、東部全域に展開している。中央部や東部の東側である舌状台地の先端からは消滅している。集落が展開する舌状台地の平坦部には、9世紀と比べてみると当期のほうが、住居跡と掘立柱建物跡の密度が若干薄くなっている。引き続き竪穴住居のほかに掘立柱建物が建てられるなど、集落を構成する建物群には前期と類似するところも認められる。

11世紀では、竪穴住居跡1軒のみであることから、明らかに古代の集落そのものの終焉の様相を示している。

このように、薬師後遺跡は古墳時代後期から平安時代後期まで集落が継続して営まれてきたが、掘立柱建物群が建てられるなど、奈良・平安時代が集落として最も繁栄していたものと思われる。当遺跡の所在している稲敷市椎塚は、平安時代中期に著された『和名類聚抄』の記載に見られる「小野郷」に含まれるものと推定され、当遺跡は信太郡小野郷の中でも、拠点的な集落（母村）であったと考えられる。また、出土遺物の中には、当時的高级品である東海地方で生産された灰釉陶器・緑釉陶器といった施釉陶器や、文字の普及を物語る円面硯・墨書土器・朱書土器・刻書土器が含まれるなど、集落内に官人層あるいは富裕層の人々が居住していた可能性が高い。

## 6 奈良・平安時代の須恵器の産地別特徴（Ⅰ区・Ⅲ区の胎土肉眼観察から）

須恵器の生産地編年をもとに各時期を区分するために、須恵器の産地同定を試みた。胎土の肉眼観察による分類を行ったが、その特徴は以下の通りである。

- ・「新治窯跡群A類」は、角をもつ白色粒子（長石）、角をもつ透明粒子（石英）、白雲母とも多量含まれている胎土。
- ・「新治窯跡群B類」は、角をもつ白色粒子（長石）、角をもつ透明粒子（石英）が多量、白雲母が微量含まれるか見られない胎土。
- ・「稲敷窯跡群A類」<sup>2)</sup>は、小さな白色粒子（長石）、小さな透明粒子（石英）が少量、黒雲母（金雲母）、短い白色針状鉱物（海綿骨針）が微量含まれる胎土。
- ・「稲敷窯跡群B類」は、白色粒子（長石）、透明粒子（石英）が少量、鉄分が噴き出したものと思われる黒色粒子が微量含まれる胎土。

なお、Ⅺ期（10世紀前葉）以降は新治窯跡群産須恵器はほとんどみられなくなるため、ここでは扱わない。

### (1) V期〔8世紀前葉〕

新治窯跡群産須恵器については、永井寄居窯段階、一丁田1・2号窯段階の須恵器群を当期とした。胎土の肉眼観察による分類では、新治A類6点、稲敷A類1点、稲敷B類1点である。新治産も仮稲敷産も、器形や成形・調整などの手法に差異はあまり認められない。

### (2) VI期〔8世紀中葉〕

新治窯跡群産須恵器については、東城寺寄居前窯A段階及び東城寺窯段階の須恵器群を当期とした。胎土の肉眼観察による分類では、新治A類1点、新治B類2点、稲敷A類2点、その他に猿投産が1点確認されている。新治産も稲敷産も、器形に差異はあまり認められない。坏の体部下端の調整について、新治産が手持ちヘラ削り、稲敷産が回転ヘラ削りと違いが認められる。

(3) VII期〔8世紀後葉〕

新治窯跡群産須恵器については、東城寺桑木窯段階の須恵器群を当期とした。胎土の肉眼観察による分類では、新治B類3点、稲敷A類4点、稲敷B類1点で、その他に東海地方産が1点認められる。新治産も仮稲敷産も、器形や成形・調整など手法に差異はあまり認められない。

(4) VIII期〔9世紀前葉〕

新治窯跡群産須恵器については、小高村内窯段階の須恵器群を当期とした。胎土の肉眼観察による分類では、新治A類14点、新治B類15点、稲敷A類20点、稲敷B類25点で、その他に木葉下産、猿投産がそれぞれ1点ずつ認められる。新治産も稲敷産も、器形に差異はあまり認められない。坯の底部の切り離し技法は、新治A類が回転ヘラ切り、稲敷A類が回転ヘラ切りと回転糸切り、稲敷B類が回転糸切りと違いが認められる。

(5) IX期〔9世紀中葉〕

新治窯跡群産須恵器については、東城寺寄居前窯B段階及び小野1号窯段階の須恵器群を当期とした。胎土の肉眼観察による分類では、新治A類12点、新治B類4点、稲敷A類19点、稲敷B類3点である。新治産も稲敷産も、器形に差異はあまり認められないが、稲敷A類の中に色調が橙色系、もしくは黒色系で、焼成が良好でないものが一定量存在している。坯の底部の切り離し技法は、新治A類が回転ヘラ切り、稲敷A類が回転ヘラ切りと回転糸切りで、前段階と同じ違いが認められる。

(6) X期〔9世紀後葉〕

新治窯跡群産須恵器については、小野1号窯に後続する段階(X3段階)の須恵器群を後葉とした。胎土の肉眼観察による分類では、新治A類2点、新治B類1点、稲敷A類12点、稲敷B類1点で、その他に木葉下産が1点認められる。材質別では須恵器の割合が少なくなっている。稲敷A類の中に色調が橙色系で、焼成が還元炎ではない須恵器(焼成が良好ではない須恵器)、つまり酸化炎焼成の須恵器が一定量存在している。

## 7 中世・近世の様相

今回の調査では、調査区のほぼ全域から当期に属する方形竪穴遺構7基、火葬土坑5基、地下式坑1基、粘土貼土坑1基、土坑102基、溝跡26条を検出した。また、これらの遺構及び表土層などの遺構外からは、土師質土器(小皿・内耳鍋)、瀬戸・美濃系陶器(平碗・折縁小皿・反り皿・播鉢)、常滑系陶器(片口鉢)、笠間・益子系陶器(碗)、土製品(球状土錘)、石器(砥石)、古銭(「皇宋通寶カ」・「大観通宝」)等が出土している。これらの検出された遺構のうち、溝跡は出土遺物から時期をある程度絞り込むことができたが、その他の遺構は形態や覆土の内容によって当時代と考えたものである。本項では、遺構とそれに伴う遺物だけでなく、遺構外出土遺物を含めて当期の様相について記述する。

方形竪穴遺構、火葬土坑、地下式土坑、粘土貼土坑及び土坑は、調査区の中央部から東部にかけて位置している。方形竪穴遺構はI区で5基、II区で2基を検出している。規模はいずれも長軸約3m、短軸約2mで、平面形はほとんどが長方形である。主軸方向は第4・6号方形竪穴遺構以外はいずれも東に振れている。底面はいずれも平坦であるが、特に踏み固められたところは確認できなかった。内部施設としてピットを有するものは第2・5号方形竪穴遺構の2基である。火葬土坑はいずれも長軸約1mで、平面形はT字形のものが4基で、8字形のものは1基である。主軸方向はいずれも西に振れている。また、中世のものと考えられる地下式坑と粘土貼土坑は、中央部の東寄りに位置している。地下式坑は東に、粘土貼土坑は西に軸方向

は振れている。土坑については、遺物の有無や重複関係、覆土の内容から時期の判断を行った結果、性格を解明することはできなかったが、中世の土坑は2基、近世の土坑は5基と考えられる。これらの他、時期不明の土坑の中に方形竪穴遺構群や火葬土坑群といっしょに墓域を形成していた土坑墓（墓壙）が含まれる可能性がある。また、中央部から東部にかけて、出土遺物が少ないが、形状がほとんど長方形で、規格性が感じられる土坑が多数確認されている。ほとんどの覆土がロームブロックを多く含む黒褐色土または暗褐色土によって埋め戻されていたことから、畑作に伴う近世の芋穴のような性格が考えられる。

溝跡は、東部の第1・2・4・5～10・12号溝跡は、いずれも台地を横断するように北東から南西方向に走っており、主軸方向がすべてN-143～156°-Wの範囲に納まっている。これらはの溝跡は相互に関連し合う区画溝であったものと思われる。また、西部の第15～19号溝跡は台地を横断及び縦断するように走っており、それによって方形と思われる区画を造り出している。しかし、調査区域外に延びているため、全体像をとらえることはできなかった。第20～22・26号溝跡も台地を横断及び縦断するように走っており、それによって方形区画を造り出している。特に、第20号溝跡は、方形に整地された段切状の平坦地に伴っている。また、第22・23・26号溝跡は台地の縁辺部に沿うように走っている。これは台地斜面部の上場に第22・26号溝、下場に第23号溝をそれぞれ掘り込み、斜面部をさらに切り土整地して、切岸状にした可能性も考えられる。西部では、舌状台地の先端部に当たるためか、当期にいたって台地上から斜面部に至るまで改変が著しく加えられている。しかし、城館跡のような施設の確認には至らなかった。なお、中央部の台地平坦部から、段切状の平坦地を通して斜面部に向かって走っている第27～39・50号溝跡と、第1・2・4・5～10・12号溝跡と交差するように、東部南端の段切り状に整地された斜面部を東西に走っている第40～47号溝跡は、遺物がほとんど出土しておらず、時期や性格を特定できなかったため、当期の遺構との関係も明確ではない。

次に、土器は、土師質土器の小皿と内耳鍋が出土している。どちらも胎土に金雲母が含まれているが、小皿には針状鉱物も含まれている。この胎土により、小皿は信太郡内で生産された16世紀後葉の「ロクロかわらけ」と推定できる。陶器は、瀬戸・美濃系陶器の平碗、折縁小皿、反り皿、挿鉢、常滑系陶器の片口鉢が出土している。瀬戸・美濃系陶器の折縁小皿は古瀬戸後期様式Ⅱ期で15世紀前葉のもの、平碗は古瀬戸後期様式Ⅲ期で15世紀前～中葉のもの、反り皿は瀬戸・美濃大窯第4段階で16世紀後葉のもの、挿鉢は瀬戸・美濃大窯期で15世紀末から16世紀初頭とそれぞれ思われる。常滑系陶器の片口鉢は6b型式の13世紀後葉のものと思われる。これらの出土遺物及び細片のため図示できなかった出土遺物によって導き出された年代観は、その大半が中世後半～近世前半（15～17世紀）である。ただし、第17号溝跡出土の常滑片口鉢だけは100年以上古いものとなってしまうが、これは伝世したものとしてとらえ、遺構の時期は先の中世後半～近世前半（15～17世紀）と考えるのが妥当と思われる。

## 7 おわりに

今回の調査は、限られた範囲であったが、遺構や出土遺物から人々の生活の痕跡を確認し、次のような変遷を推測することができた。古墳時代後期（6～7世紀）に、竪穴住居を中心とする集落が営まれ始め、集落域は舌状台地の西側から次第に全域へと広がっていく。7世紀中葉から後葉に一時衰退したものの、奈良時代（8世紀）には再び集落が営まれ、平安時代前期（9世紀）にそのピークを迎えている。掘立柱建物を伴う大規模な集落が形成されていき、この地域の拠点的な役割を担っていたものと思われる。しかし、平安時代後期（11世紀後葉）になると集落としては終わりを迎えている。また、中世後半から近世前半（15～



17世紀)には台地上を区画する溝が掘り込まれたが、城館跡のような施設は存在しなかった。しかし、方形  
竪穴遺構・火葬土坑及び土坑が検出されたことから小さな墓域が形成されていた可能性が考えられる。

註)

- 1) 鳥の描かれた須恵器坏について、下野薬師寺歴史館の賀来孝代氏からご教示をいただいた。
- 2) 赤井博之・佐々木義則「茨城県における須恵器の流通－供膳器を中心とした須恵器の肉眼観察による産地同定と今後の課題－」  
『婆良岐考古』第28号 婆良岐考古同人会 2006年5月

参考文献

- ・ 浅井哲也「カマドが東へ移るとき」『茨城県考古学協会誌』第5号 茨城県考古学協会 1993年6月
- ・ 古代生産史研究会編『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』1997年3月
- ・ 桃崎祐輔「常総地域の中世陶磁器と土器—中世びとのくらしとつわ—」『焼き物にみる中世の世界—県内出土の土器・陶磁器を中心に—』上高津ふるさと歴史の広場 1999年3月
- ・ 山中敏史ほか「日本考古学協会1995年度茨城大会記念講演及びシンポジウム基調報告記録」『茨城県考古学協会誌』第12号 茨城県考古学協会 2000年5月
- ・ 藤沢良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 瀬戸市埋蔵文化財センター 2002年3月
- ・ 佐々木義則「常陸国河内郡における掘立柱建物跡群の展開—8・9世紀の様相—」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会 2005年5月
- ・ 藤沢良祐『中世瀬戸窯の研究』高志書院 2008年2月
- ・ 高島英之『古代東国地域史と出土文字資料』東京堂出版 2006年3月
- ・ 大関武「信太郡東部における奈良・平安時代の土器様相」『埋蔵文化財部 年報27 平成19年度』茨城県教育財団 2008年9月

# 付 章

パリノ・サーヴェイ株式会社

## I 薬師後遺跡（Ⅱ区）の遺構覆土の珪藻分析

はじめに

薬師後遺跡は、堂ノ上遺跡の南東2kmに位置し、古墳時代後期や奈良・平安時代の住居跡等が検出されている。本報告では、薬師後遺跡の水室の可能性のある遺構内から採取された土壌について珪藻分析を実施し、水室の可能性について検討する。

### 1 試料

試料は、水室の可能性が考えられている第一号竪穴状遺構の覆土1点である。

### 2 分析方法

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、渡辺（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann（1990）に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms；広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、貧塩性種（淡水生種）については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性についてはAsai & Watanabe（1995）、渡辺（2005）の環境指標種を参考とする。

### 3 結果

結果を表1、図1に示す。遺構覆土からは、堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。完形殻の出現率は、約50%と化石の保存状態は良好とはいえない。産出分類群数は、14属18分類群である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

遺構覆土からは、淡水域に生育する珪藻と、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻とが産出する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）では、貧塩不定性種、pH不定性種、流水不定性種が優占する。主要種は、流水不定性で好清水性種の*Encyonema latens*が約40%を占め、流水不定性の*Amphora copulata*, *Gomphonema parvulum*, 好清

表1. 薬師後遺跡の珪藻分析結果

分類群\生態性・試料	生態性			環境指標種	試料
	塩分	pH	流水		SK-484
Centric Diatoms (中心型珪藻類)					
<i>Orthoseira roeseana</i> (Rabh.) O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	7
<i>Orthoseira epidendron</i> (Ehrenb.) H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	RA	5
Raphid Pennate Diatoms (有縦溝羽状珪藻類)					
Monoraphid Pennate Diatoms (単縦溝羽状珪藻類)					
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	1
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)					
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.) Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	4
<i>Cymbopleura naviculiformis</i> (Auerswald) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O, U	1
<i>Encyonema latens</i> (Krasske) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	42
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	3
<i>Navicula slesvicensis</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	T	1
<i>Diademsis contenta</i> (Grun.ex Van Heurck) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1
<i>Diademsis contenta</i> var. <i>biceps</i> (Arnott ex Grunow) Hamilton	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	1
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	21
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	4
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>brevicostata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	2
<i>Pinnularia brebissonii</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	1
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
管縦溝類					
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA, U	10
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1
短縦溝類					
<i>Eunotia minor</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O, T	3
淡水～汽水生種					1
淡水生種					110
珪藻化石総数					111

凡例

H.R:塩分濃度に対する適応性

Euh:海水生種, Euh-Meh:海水生種-汽水生種, Meh:汽水生種, Ogh-Meh:淡水-汽水生種, Ogh-hil:貧塩好塩性種, Ogh-ind:貧塩不定性種, Ogh-hob:貧塩嫌塩性種, Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオンに対する適応性

al-bi:真アルカリ性種, al-il:好アルカリ性種, ind:pH不定性種, ac-bi:好酸性種, ac-bi:真酸性種, unk:pH不明種

C.R.:流水に対する適応性

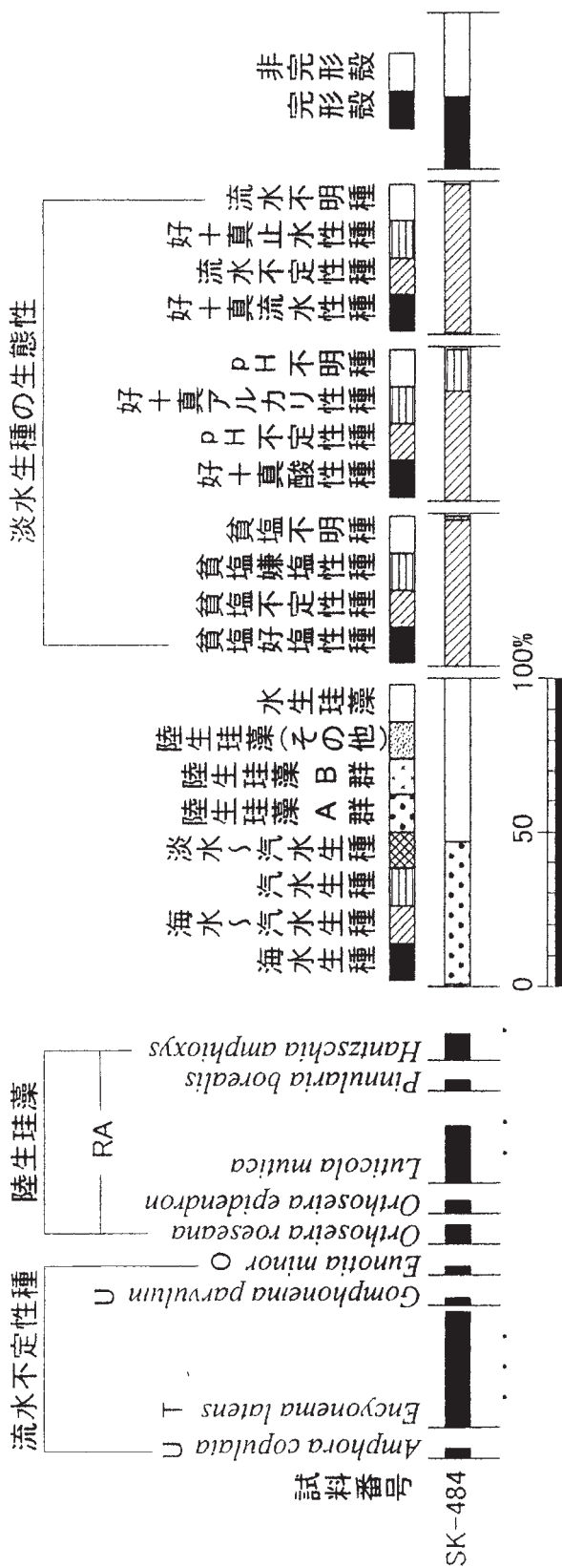
l-bi:真止水性種, l-ph:好止水性種, ind:流水不定性種, r-ph:好流水性種, r-bi:真流水性種, unk:流水不明種

環境指標種群

K:中～下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)

S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(Asai and Watanabe, 1995)

R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)



海水—汽水—淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は2%未満の産出を示す。

○: 沼沢湿地付着生種, P: 高層湿原指標種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種, RA: 陸生珪藻 A 群)

図1 主要珪藻化石群集



水性種で沼沢湿地付着生種の*Eunotia minor*を伴う。陸生珪藻では、耐乾性の高い陸生珪藻A群の*Luticola mutica*が約20%を占め、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*, *Orthoseira rooseana*, *Pinnularia borealis*等を伴う。

#### 4 考察

遺構の覆土からは、水生珪藻と陸生珪藻とがほぼ半々ずつ産出した。よって、遺構覆土に含まれる珪藻化石は、乾いた好气的環境に由来するものと、淡水域に由来するものとに分けられる。

ここで、遺跡が所在する稲敷市椎塚は、小野川と新利根川の間挟まれた筑波稲敷台地南東端部台地上の標高約25mに位置している。この台地は、下末吉海進とその海退によって形成された海成堆積物とそれを覆う古鬼怒川系の延長川による河成平野堆積物（上位台地C）が堆積しており、表層は関東ローム層で覆われている（早川，2000）。したがって、台地上のロームに掘り込まれた遺構覆土で水生珪藻と陸生珪藻とがほぼ同じ割合で産出することは考えにくい。

さらに、水生珪藻の汚濁に対する適応性を見ると、汚濁の全く認められない清浄な水域にのみ生育する好清水性種が優占しており、汚濁の進んだ腐水域に生育する好汚濁性種は皆無であった。ちなみに、水質汚濁の程度を珪藻の種組成に基づく汚濁指数値として数量的に求められる方法として、浅井・渡辺（1995）により開発された有機汚濁指数（DAI<sub>po</sub>）値を求めると71.2となる。この値は、水質のきれいな弱一貧腐水性水域（ $\beta$ -oligosaprobic）の範疇に区分される（渡辺ほか，2005）。

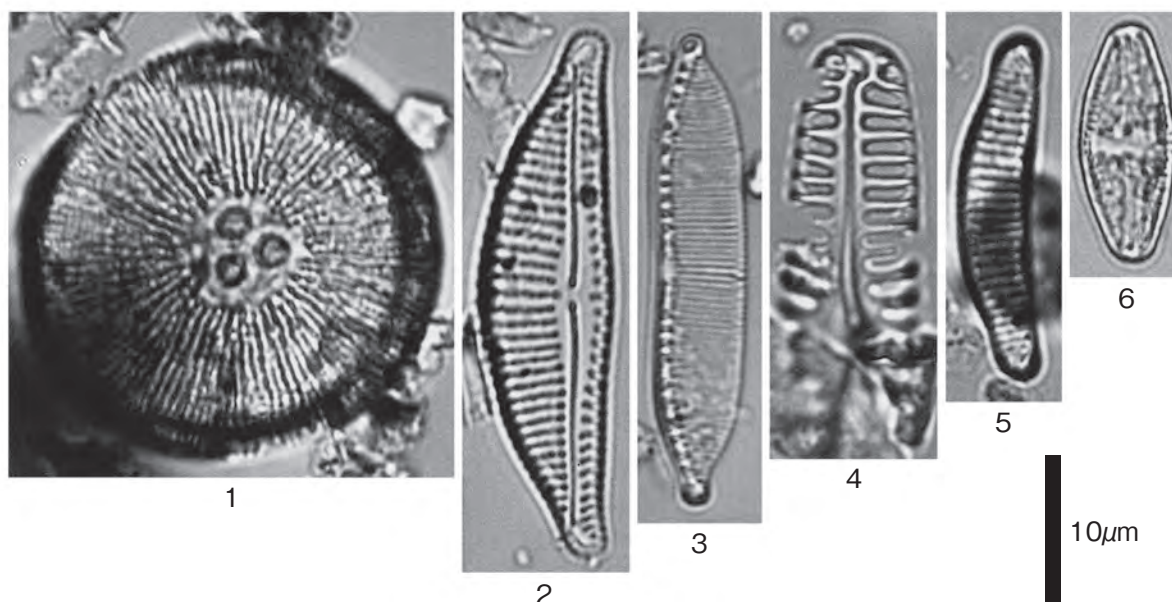
遺構は、氷室の可能性が指摘されている。遺構が氷室の場合、壁や地山（台地構成層）、周囲の台地上の乾いた好气的環境から遺構内に二次堆積した土壌、あるいは断熱材として使用された覆い物などに由来する陸生珪藻と、氷の中に本来含まれていた水生珪藻などが検出されると考えられる。したがって、今回の生育環境の相反する種類の産状は、遺構が氷室であったことを反映している可能性がある。氷室と考えられる土坑の珪藻分析は、これまでにも行われており（たとえば、中山，1966）、今回と同様に水域由来の水生珪藻と陸上由来の陸生珪藻とが高い割合で産出する組成が得られている。

今後は、自然科学分析調査として今回のような氷室の可能性のある遺構の分析例や、台地上の遺構の例として湧水を溜めていた掘り井戸等の分析例をさらに蓄積したいと考える。その上で、考古学所見と併せて遺構用途の検討につなげることが望まれる。

#### 引用文献

- 安藤一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理，42，73-88。
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 原口和夫・三友清史・小林弘，1998，埼玉の藻類 珪藻類。埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，527-600。
- 早川唯弘，2000，5-2 関東平野北東部一鹿島一行方隆起帯と関東平野。貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦（編）「日本の地形4 関東・伊豆小笠原」，東京大学出版会，183-191。
- 伊藤良永・堀内誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌，6，23-45。
- 小杉正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究，27，1-20。
- 小林弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲保・長田啓五，2006，小林弘珪藻図鑑。第1巻，(株)内田老鶴圃，531p。
- Krammer, K., 1992, *PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26*. J.CRAMER, 353p.

- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, *Bacillariophyceae.1.Teil : Naviculaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1.* Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, *Bacillariophyceae.2.Teil : Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.* Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, *Bacillariophyceae.3.Teil : Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.* Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, *Bacillariophyceae.4.Teil : Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.* Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R.L., 1974, *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.* 334p.  
In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/ 4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 中山晋, 1996, <研究ノート>古代日本の「氷室」の実体 - 栃木県下の例を中心として - 立正史学, 第79号抜刷, 43-68.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990, *The diatoms. Biology & morphology of the genera.* 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- Vos, P.C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270, 285-296.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻彰洋・伯耆晶子, 2005, 淡水珪藻生態図鑑.内田老鶴圃, 666p.
- 柳沢幸夫, 2000, II-1-3-2-(5) 計数・同定.化石の研究法—採集から最新の解析法まで—, 化石研究会, 共立出版株式会社, 49-50.



1. *Orthoseira roeseana* (Rabh.) O'Meara (氷室; SK-484)
2. *Encyonema latens* (Krasske) D.G.Mann (氷室; SK-484)
3. *Hantzschia amphioxys* (Ehren.) Grunow (氷室; SK-484)
4. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (氷室; SK-484)
5. *Eunotia minor* (Kuetz.) Grunow (氷室; SK-484)
6. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann (氷室; SK-484)

図版1 薬師後遺跡の珪藻化石

## II 薬師後遺跡（Ⅲ区）土師器甕内覆土の分析

はじめに

薬師後遺跡は、稲敷市の南部（旧江戸崎町）、小野川と利根川に挟まれた稲敷台地の中の小さな舌状台地上に立地する。今回の発掘調査では、東側の1区と西側の3区より、古墳時代後期（6世紀）から平安時代（10世紀）にかけての集落跡を中心に、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、陥し穴、火葬土坑、土坑、地点貝塚、溝などの遺構や、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土師質土器、陶器、磁器、土製品、石製品、鉄製品などの旧石器時代から近世にかけての遺物が多く検出されている。

本報告では、3区の住居跡より出土した古墳時代後期（6世紀）と考えられる土師器甕について、甕内を充填する土壌を洗い出して得られた炭化物の種類を確認し、当時の植物利用や周辺植生に関する資料を作成する。

### 1 試料

試料は、3区住居跡SI-67の中央部ほぼ床面から正位に近い状態で出土した、古墳時代後期（6世紀）と考えられる土師器甕内から採取された土壌1点（No.27土器内）である。

### 2 分析方法

試料450cc（516.5g）を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や炭化材などを抽出する。

種実は、双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から種類と部位を同定し、個数を数える。炭化材は、自然乾燥後、手で持つことが可能な2片を選択し同定する。木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）を参考にする。

分析後の種実と炭化材は容器に入れ、種実には70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。分析残渣は70℃ 48時間乾燥後の重量を求め、袋に収納する。

### 3 結果

結果を表2に示す。種実1個、炭化材の微細片19個の他に、昆虫の破片48個、土器1個が検出された。分析残渣（36.6g）には、長さ3-6mm、径1.5-3mm程度の長楕円体の土粒が多量確認された。

種実1個は、破片の状態で、落葉低木のタラノキ（*Aralia elata* (Miq.) Seemann：ウコギ科タラノキ属）の核（内果皮）に同定された。淡灰褐色、長さ1.8mm、幅1.5mm程度の扁平な半月形。腹面はほぼ直線状で片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走り、表面はざらつく。

表2. 微細物分析結果

ISY-3区		
SI-67		
分類群・部位	No.27土器内	備考
タラノキ核	1個	破片
炭化材	19個	カヤ（2個）確認
昆虫	48個	
土器	1個	
分析残渣	36.6g	土粒（昆虫の糞?）多量確認
分析量	450cc（516.5g）	

炭化材は、2個は針葉樹のカヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.: イチイ科カヤ属) に同定された。解剖学的特徴は、軸方向組織は仮道管のみで構成され、観察した範囲に樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。放射組織は単列、1-10細胞高。

#### 4 考察

土師器甕内を充填する土壤より検出された炭化材は、2個がカヤに同定された。カヤは主に暖地を中心に分布する針葉樹で、木材は極めて重硬で、強度・耐水性に優れた材質を有する。茨城県内では、これまでに半分山遺跡(ひたちなか市)の弥生時代後期や古墳時代後期の住居跡出土炭化材や、豊郷条里遺跡の5世紀後半の刀形木製品および8世紀前半の杭にカヤが確認された例がある(鹿島町教育委員会, 1983, 1984; パリノ・サーヴェイ株式会社, 2005)。いずれも沿海地の遺跡であり、弥生時代後期から古代にかけて茨城県の沿海地を中心にカヤが分布していたことが推定される。本遺跡も比較的沿海地に近い立地であり、周囲にカヤが生育していたことが推定される。

一方、種実1個はタラノキに同定された。タラノキは丘陵や低い山地の崩壊した斜面や荒地などに生育する落葉低木であることから、周囲に生育していたものに由来すると思われる。しかし、低湿地遺跡など特別な場合を除けば、炭化していない限り種実は残らないといってよく、解析に関しては炭化種実以外を除外して考えた方が妥当だという意見もある(吉崎, 1992)。今回検出されたタラノキの核は、炭化していないことから、遺構が埋没する過程などで混入した後代のものである可能性があり、試料採取時及び採取後の履歴、検出された種実の年代等の検証等、慎重に評価することが望まれる。

また、分析残渣(36.6g)中に多量認められた、長さ3-6mm、径1.5-3mm程度の長楕円体の土粒は種実ではない。現時点では断定はできないが、コガネムシ科の幼虫の糞と特定された奈良県桜井市カタハラ1号墳(6世紀中頃)の横穴式石室床面から大量出土した土粒に似る。

#### 引用文献

- 林昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 鹿島町教育委員会, 1983, 木製品. 「鹿島湖岸北部条里遺跡III 豊郷条里遺跡須賀II地区」, 『鹿島町の文化財』第32集 11-13.
- 鹿島町教育委員会, 1984, 木製品. 「鹿島湖岸北部条里遺跡IV 一宮中条里遺跡瓜生I地区 - 豊郷条里遺跡須賀II地区・七反田遺跡-」, 『鹿島町の文化財』第38集 42-43.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2005, 船窪遺跡群自然化学分析. 「船窪遺跡(第2分冊)」『(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第32集, ひたちなか市船窪土地区画整理組合・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社, 337-377.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナル.No.355, 2-14.





1



2



3

4

1 mm

5 mm

2 mm

(1)

(2)

(3,4)

1. タラノキ核 (ISY-3区 SI-67 ; No.27土器内)  
3. 土粒 (ISY-3区 SI-67 ; No.27土器内)

2. 土粒 (ISY-3区 SI-67 ; No.27土器内)  
4. 土粒 (ISY-3区 SI-67 ; No.27土器内)

図版2 種実遺体・土粒

### Ⅲ 薬師後遺跡（Ⅳ区）出土炭化材の樹種

はじめに

薬師後遺跡は、小野川右岸の標高25～28mの台地上に立地し、古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡、平安時代の氷室と考えられる大型の竪穴状遺構、平安時代の掘立柱建物跡等が検出されている。

本報告では、古墳時代後期（7世紀後葉）の第187号住居跡から出土した炭化材の樹種同定を実施する。

#### 1 試料

試料は、第187号住居跡から出土した炭化材3点（No.119, 132, 136）である。

#### 2 分析方法

炭化材を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を製作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の形態・名称等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、各分類群の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

#### 3 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、全て常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

表3. 樹種同定結果

遺構	番号	出土位置	層位	樹種
第187号住居跡	No.119	西部	覆土下層	コナラ属アカガシ亜属
	No.132	竈手前	覆土下層	コナラ属アカガシ亜属
	No.136	北東コーナー	覆土上層	コナラ属アカガシ亜属

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のもの、複合放射組織と認められる。

#### 4 考察

第187号住居跡は、長軸8.43m、短軸8.40mのほぼ方形を呈し、北壁中央に竈が構築されている。炭化材は、焼土塊と共に住居内北側を中心に多数出土し、特に竈周辺、竈側の2か所の柱穴内から多く出土している。さらに、炭化材と焼土塊の位置が部分的に集中していること、床面まで焼けていないこと、人為的に埋積したと考えられる覆土上層から下層まで炭化材と焼土塊が認められること等から、住居の機能停止後に取り壊し、または部分的に解体されてから焼却された焼失住居と考えられる。3点の部材は、No.119が住居中央部のやや西寄り、No.132が竈脇、No.136が北東隅から出土している。このうち、No.132は比較的大きな部材である。形状等を考慮すれば、3点の炭化材は、住居構築材などに由来すると考えられるが、廃棄された可能性があるため、部位等の詳細は不明である。これらの炭化材は、全てアカガシ亜属に同定された。

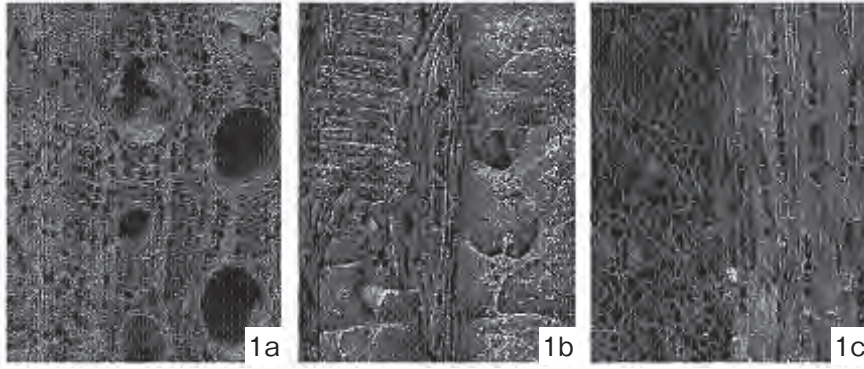
アカガシ亜属は、暖温帯に分布する常緑広葉樹であり、一般的に木材は重硬で強度が高い材質を有する（平井、1996）。今回の結果から、強度の高いアカガシ亜属を住居構築材等に利用していた可能性がある。本遺跡周辺では、小野川を挟んだ対岸に位置する堂ノ上遺跡の竪穴住居跡から出土した炭化材にアカガシ亜属、

ムクロジ、クヌギ節が確認されており、今回の結果とも調和的である。また、本遺跡では、土壌の水洗選別で得られた炭化材が、アカガシ亜属と共に暖温帯常緑広葉樹林を構成するカヤに同定されている。これらの結果から、本地域では暖温帯常緑広葉樹林の構成種が周囲に生育していたことが推定される。

本遺跡周辺地域では、7世紀代の竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種を明らかにした例は知られていない。一方、6世紀代の資料は、星合遺跡および薬師入遺跡（阿見町）や馬場遺跡（牛久市）で報告されており、いずれもクヌギ節に同定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1996，1997；野村，2008）。また、霞ヶ浦の対岸で、本遺跡からは距離的にやや離れるが、木工台遺跡（行方市）では、7世紀代の竪穴住居跡出土炭化材にクヌギ節、コナラ節、アカガシ亜属、スダジイ、ムクロジ等が確認されており、本遺跡や堂ノ上遺跡と類似する種類構成が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1998，1999）。これらの結果から、本遺跡周辺では、暖温帯常緑広葉樹林を構成するアカガシ亜属、ムクロジ、カヤや、二次林構成種であるクヌギ節、コナラ節が共に生育し、それらを住居構築材に利用していたことが推定される。

#### 引用文献

- 林 昭三，1991，日本産木材 顕微鏡写真集。京都大学木質科学研究所。
- 平井 信二，1996，木の大本科 解説編。朝倉書店，642p。
- 伊東 隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ。木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181。
- 伊東 隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ。木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所。66-176。
- 伊東 隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ。木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201。
- 伊東 隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ。木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166。
- 伊東 隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ。木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216。
- 野村 敏江，2008，薬師入遺跡出土炭化材の樹種同定。「薬師入遺跡2 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 下巻」，『茨城県教育財団文化財調査報告』第296集，茨城県教育財団，327-328。
- パリノ・サーヴェイ株式会社，1996，馬場遺跡・行人田遺跡出土の炭化材・炭化種子同定報告について。「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）馬場遺跡 行人田遺跡」，『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集，茨城県教育財団，261-264。
- パリノ・サーヴェイ株式会社，1997，第5号住居跡出土炭化材の樹種。「阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書 星合遺跡 中ノ台遺跡」，『茨城県教育財団文化財調査報告』第137集，茨城県教育財団，111-112。
- パリノ・サーヴェイ株式会社，1998，木工台遺跡から出土した炭化材の樹種。「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 木工台遺跡1」，『茨城県教育財団文化財調査報告』第140集，茨城県教育財団，394-398。
- パリノ・サーヴェイ株式会社，1999，木工台遺跡から出土した炭化材の樹種。「北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 木工台遺跡2」，『茨城県教育財団文化財調査報告』第152集，茨城県教育財団，619-621。
- 島地 謙・伊東 隆夫，1982，図説木材組織。地球社，176p。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編)，1998，広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト。伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩（日本語版監修），海青社，122p。[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



1. コナラ属アカガシ亜属 (第187号住居跡No.119)  
a : 木口, b : 柁目, c : 板目

— 200 $\mu$ m : a  
— 200 $\mu$ m : b, c

図版3 炭化材



# 写 真 図 版



薬師後遺跡周辺航空写真（米軍昭和22年撮影）







I区全景（北から）



Ⅲ区全景（南から）





第1号陥し穴  
完掘状況



第2号陥し穴  
完掘状況



第16号住居跡  
完掘状況



第22号住居跡  
完掘狀況



第37号住居跡  
完掘狀況



第38号住居跡  
完掘狀況







第38号住居跡  
P1内遺物出土状況



第46号住居跡  
遺物出土状況



第49号住居跡  
完掘状況





第54号住居跡  
完掘狀況



第56号住居跡  
完掘狀況



第64・75号住居跡  
完掘狀況

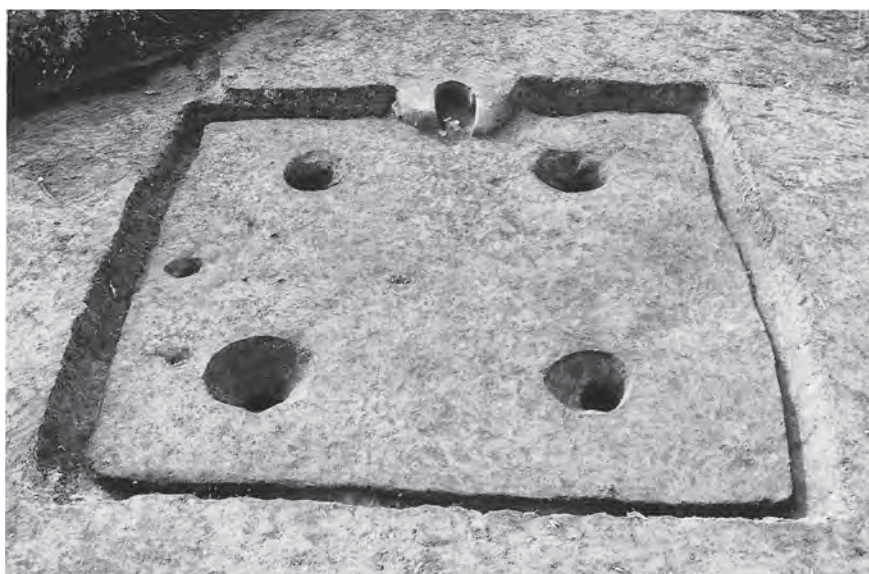




第64・75号住居跡  
遺物出土状況



第65・73号住居跡  
完掘状況

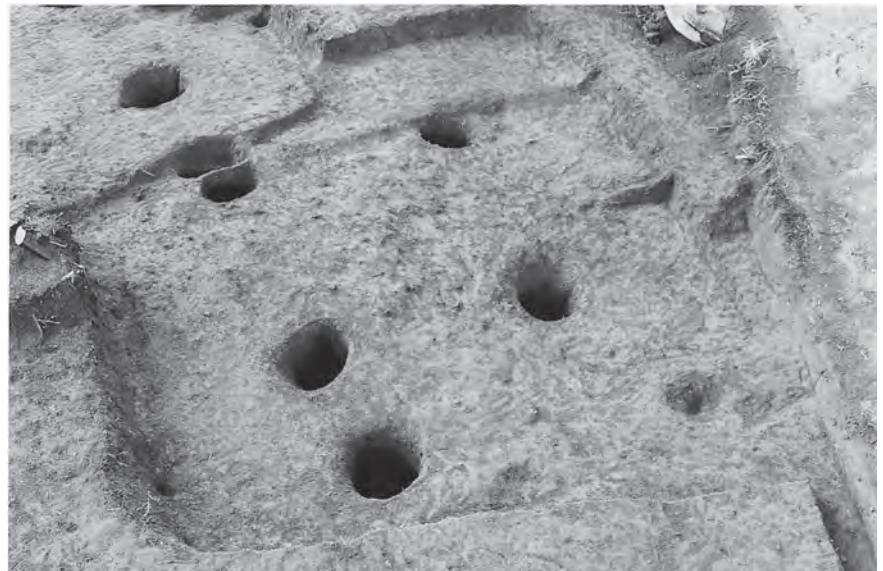


第66号住居跡  
完掘状況





第67号住居跡  
完掘狀況



第68・70号住居跡  
完掘狀況



第76号住居跡  
完掘狀況





第77号住居跡  
竈周辺遺物出土状況



第77・85号住居跡  
完掘状況



第79号住居跡  
完掘状況





第82号住居跡  
完掘狀況



第83号住居跡  
完掘狀況

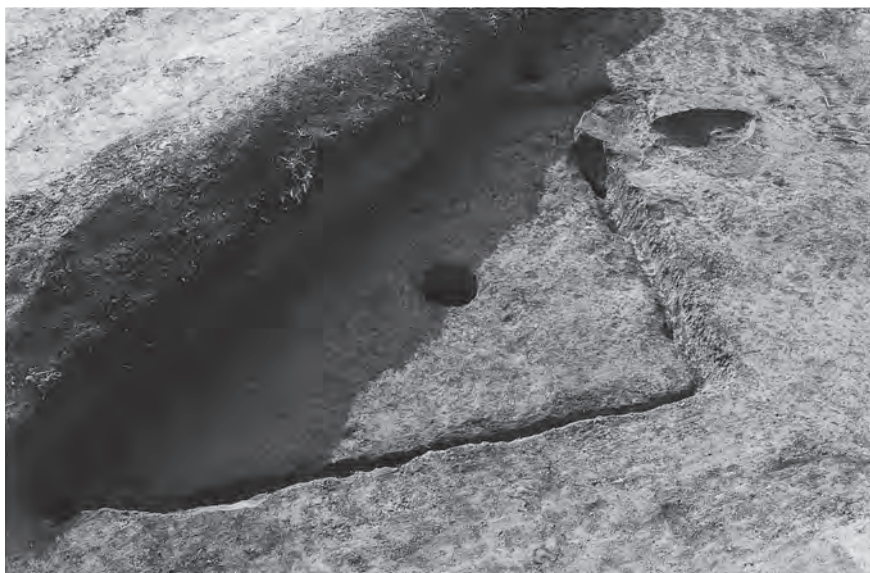


第84号住居跡  
完掘狀況





第89号住居跡  
完掘狀況



第92・98号住居跡  
完掘狀況



第93・94号住居跡  
完掘狀況





第96号住居跡  
完掘狀況



第97・99号住居跡  
完掘狀況



第105号住居跡  
完掘狀況





第18号住居跡竈左袖外遺物出土状況



第18号住居跡南西部遺物出土状況



第22号住居跡竈完掘状況



第40号住居跡竈右袖周辺遺物出土状況



第46号住居跡北西部遺物出土状況



第46号住居跡北東部遺物出土状況



第48号住居跡竈左袖外遺物出土状況



第48号住居跡竈遺物出土状況





第48号住居跡竈右袖外遺物出土状況



第48号住居跡竈遺物出土状況



第50号住居跡竈前遺物出土状況



第61号住居跡中央部遺物出土状況



第63号住居跡北西部遺物出土状況



第64号住居跡東壁際遺物出土状況



第67号住居跡P826出土状況



第70号住居跡北東部遺物出土状況





第73号住居跡竈完掘状況



第82号住居跡南部中央遺物出土状況



第76号住居跡中央部遺物出土状況



第76号住居跡竈遺物出土状況



第76号住居跡竈右袖外遺物出土状況



第81号住居跡中央部遺物出土状況

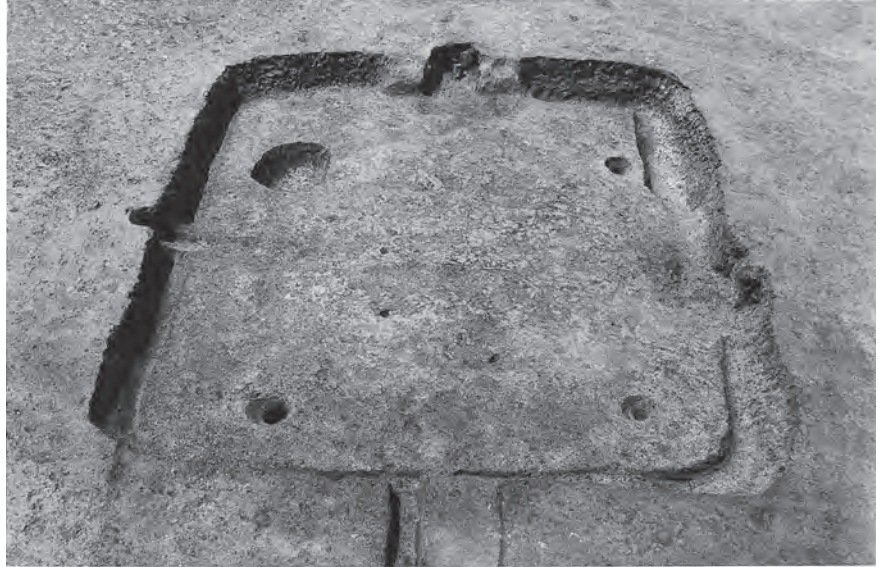


第100号住居跡完掘状況（東から）



第106号住居跡貯蔵穴遺物出土状況





第 1 号住居跡  
完 掘 状 況



第 1 号住居跡  
竈遺物出土狀況

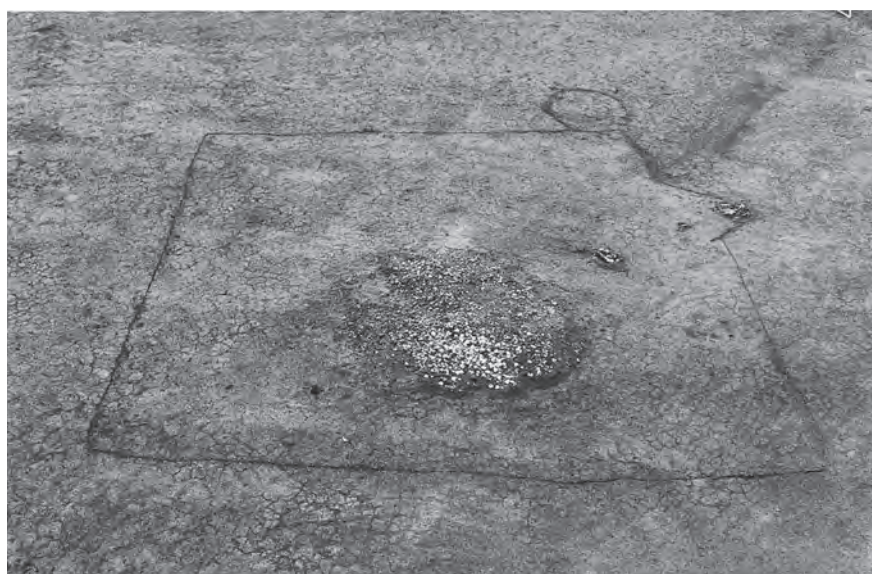


第 2 号住居跡  
完 掘 状 況





第3号住居跡  
完掘状況



第3号住居跡・  
第2号地点貝塚  
遺物出土状況



第4号住居跡  
竈遺物出土状況





第 6 号住居跡  
竈遺物出土狀況



第 9 号住居跡  
完掘狀況



第 9 号住居跡  
遺物出土狀況





第10号住居跡  
完掘状況



第11号住居跡  
完掘状況



第11号住居跡  
竈遺物出土状況



第12号住居跡  
完掘狀況



第20号住居跡  
完掘狀況



第23号住居跡  
完掘狀況







第25号住居跡  
完掘狀況



第26号住居跡  
遺物出土狀況



第27号住居跡  
完掘狀況





第28号住居跡  
完掘状況



第28号住居跡  
円面硯出土状況



第29号住居跡  
完掘状況

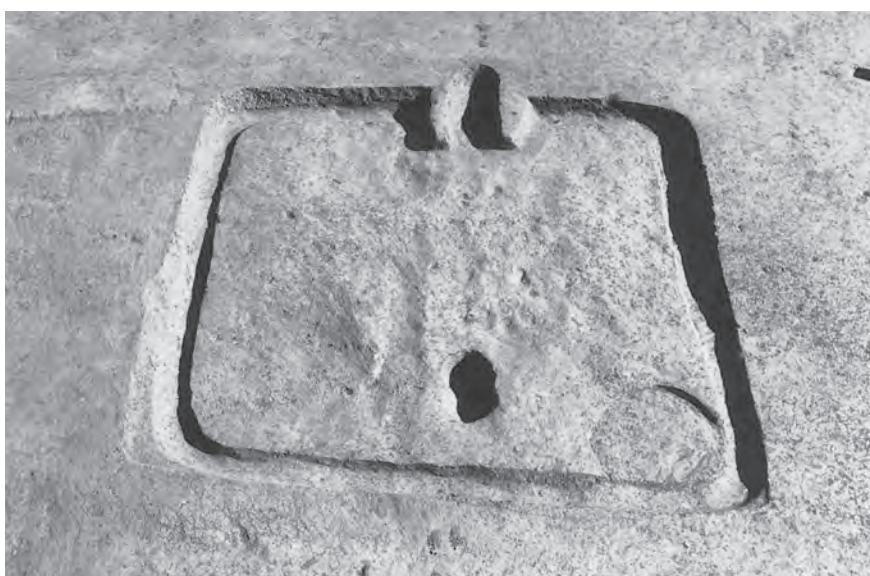




第31号住居跡  
完掘状況



第32号住居跡  
完掘状況



第34号住居跡  
完掘状況



第34号住居跡  
竈遺物出土状況



第42号住居跡  
完掘状況



第42号住居跡  
竈遺物出土状況







第44号住居跡  
完掘狀況



第47号住居跡  
完掘狀況



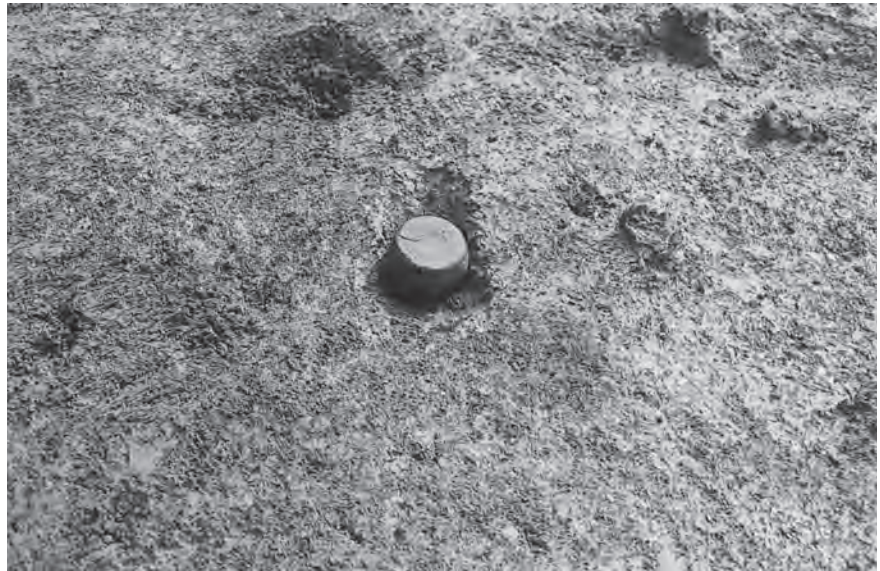
第52号住居跡  
完掘狀況



第53号住居跡  
完掘狀況



第55号住居跡  
小壺出土狀況



第72号住居跡  
竈遺物出土狀況







第1号掘立柱建物跡  
完掘狀況



第2号掘立柱建物跡  
完掘狀況



第3号掘立柱建物跡  
完掘狀況





第5号掘立柱建物跡  
完掘狀況



第5号掘立柱建物跡  
完掘狀況



第6号掘立柱建物跡  
完掘狀況





第7号掘立柱建物跡  
完掘狀況



第8・9号掘立柱建物跡  
完掘狀況



第10号掘立柱建物跡  
完掘狀況





第11号掘立柱建物跡  
完掘狀況



第13号掘立柱建物跡  
完掘狀況



第14号掘立柱建物跡  
完掘狀況





第38号土坑遺物出土狀況



第60号土坑遺物出土狀況



第72号土坑遺物出土狀況



第83号土坑遺物出土狀況



第283号土坑完掘狀況



第2号地点貝塚貝散布狀況

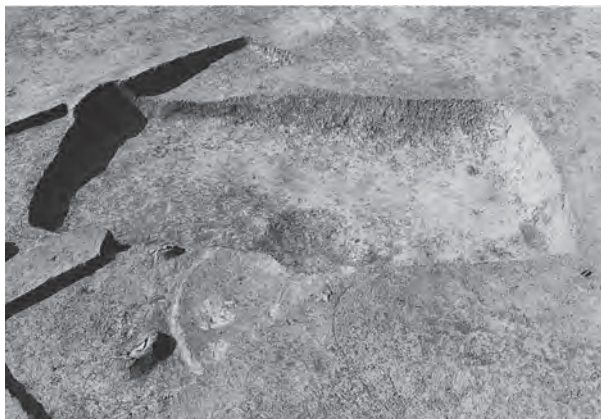


第2号遺物包含層遺物出土狀況



第2号遺物包含層遺物出土狀況





第1号方形竖穴遺構完掘狀況



第3号方形竖穴遺構完掘狀況



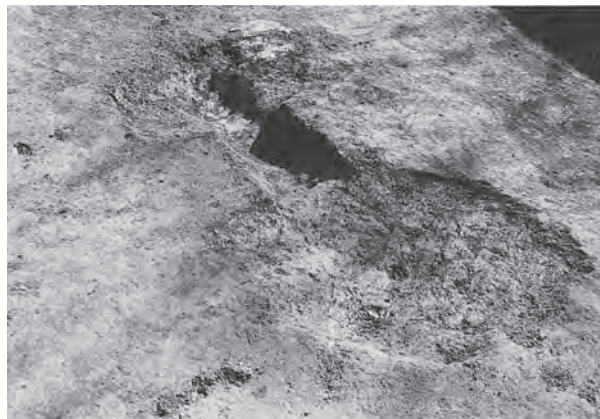
第4・5号方形竖穴遺構完掘狀況



第1号火葬土坑完掘狀況



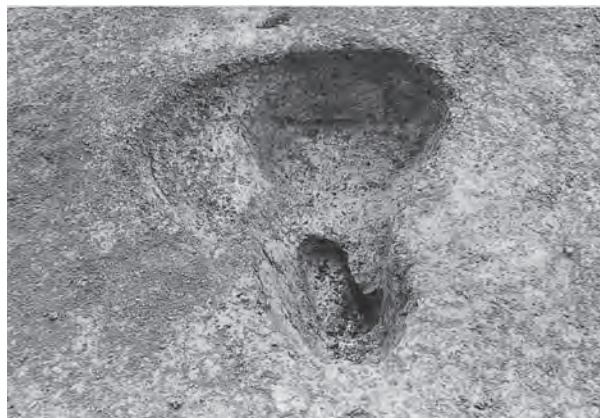
第2号火葬土坑完掘狀況



第3号火葬土坑完掘狀況



第4号火葬土坑完掘狀況



第5号火葬土坑完掘狀況





第4·5·6·7号沟迹完掘状况



第10·11号沟迹完掘状况



第15·17号沟迹完掘状况



第20号沟迹完掘状况



第1·2号沟迹完掘状况



第3号沟迹完掘状况











SI 40-365



SI 40-367



SI 46-399



SI 46-400



SI 40-366



SI 40-368



SI 46-397



SI 46-398



SI 46-403



SI 48-435



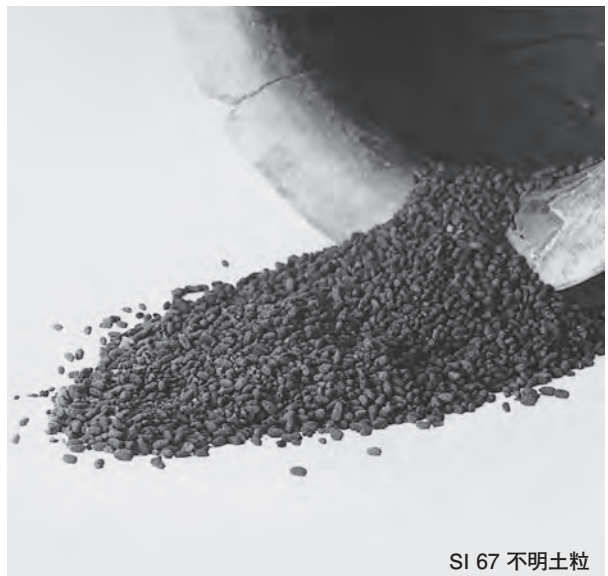
SI 48-436



SI 48-437







第48・61号住居跡出土遺物，第67号住居跡出土具・不明土粒











第65・67・70号住居跡出土遺物



第73·75·76号住居跡出土遺物







第77・79・82・83号住居跡出土遺物







第77・82・83号住居跡出土遺物





第97・106号住居跡，第3号遺物包含層，遺構外出土遺物



SI 46-DP108



SI 50-DP140



SI 46-DP109



SI 16-DP60



SI 50-DP139

遺構外-DP291

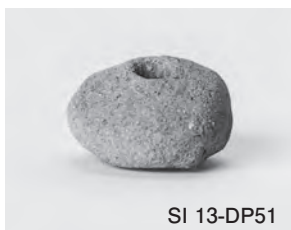


SI 67-DP237

SI 67-DP238



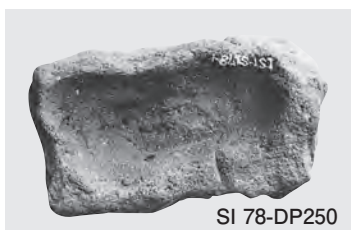
SI 18-DP61



SI 13-DP51



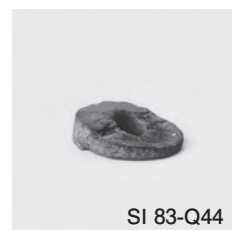
SI 46-DP110



SI 78-DP250



SI 82-Q42



SI 83-Q44



SI 82-Q43



SI 18-DP63



SI 50-Q12



HG 1-Q26



SI 82-Q41

出土土製品, 石器, 石製品





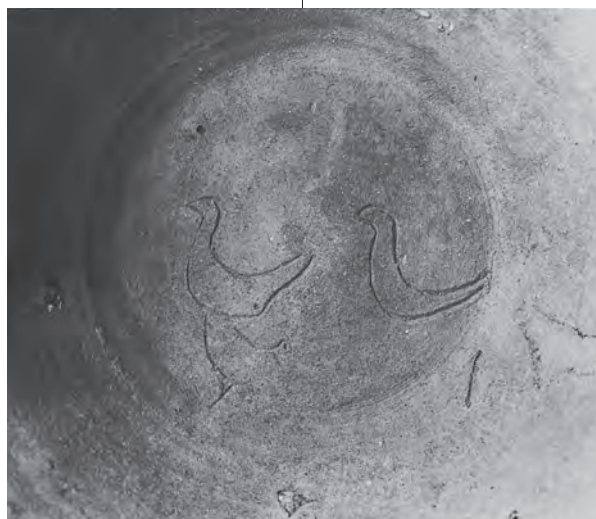


第4·5·7·8号住居跡出土遺物



PL50

I · III区



第6·9·10·11号住居跡出土遺物











PL54

I · III区



第26・28号住居跡出土遺物







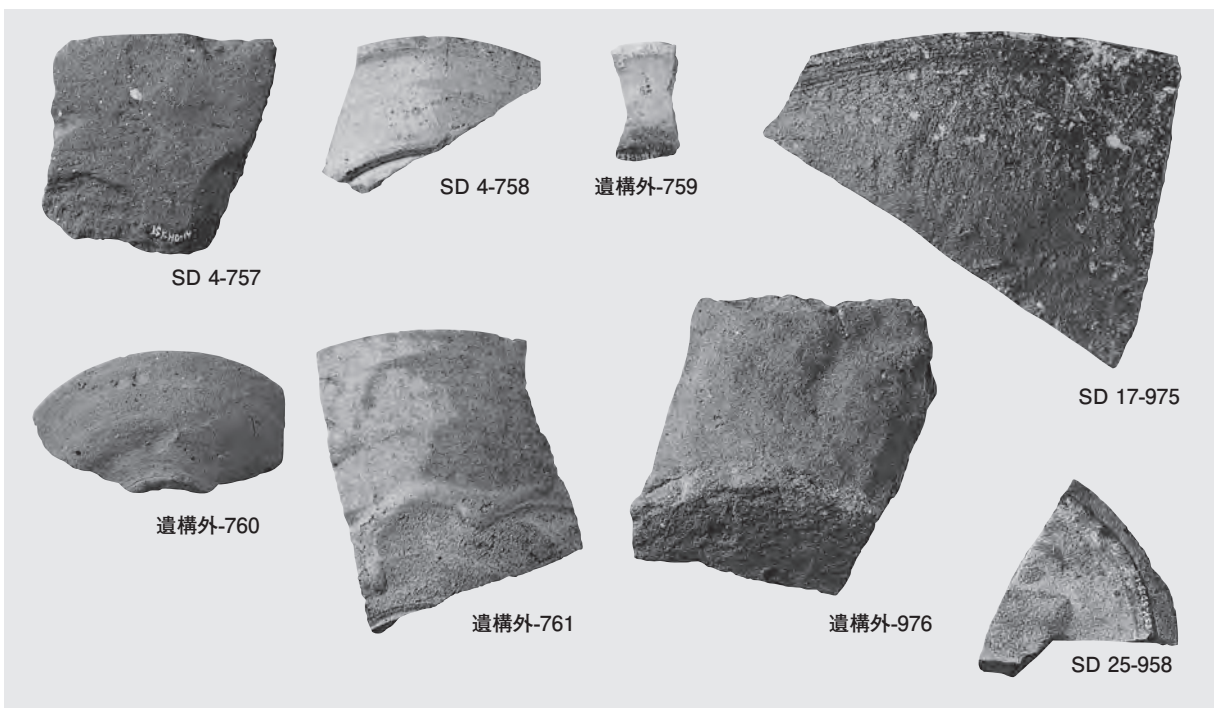
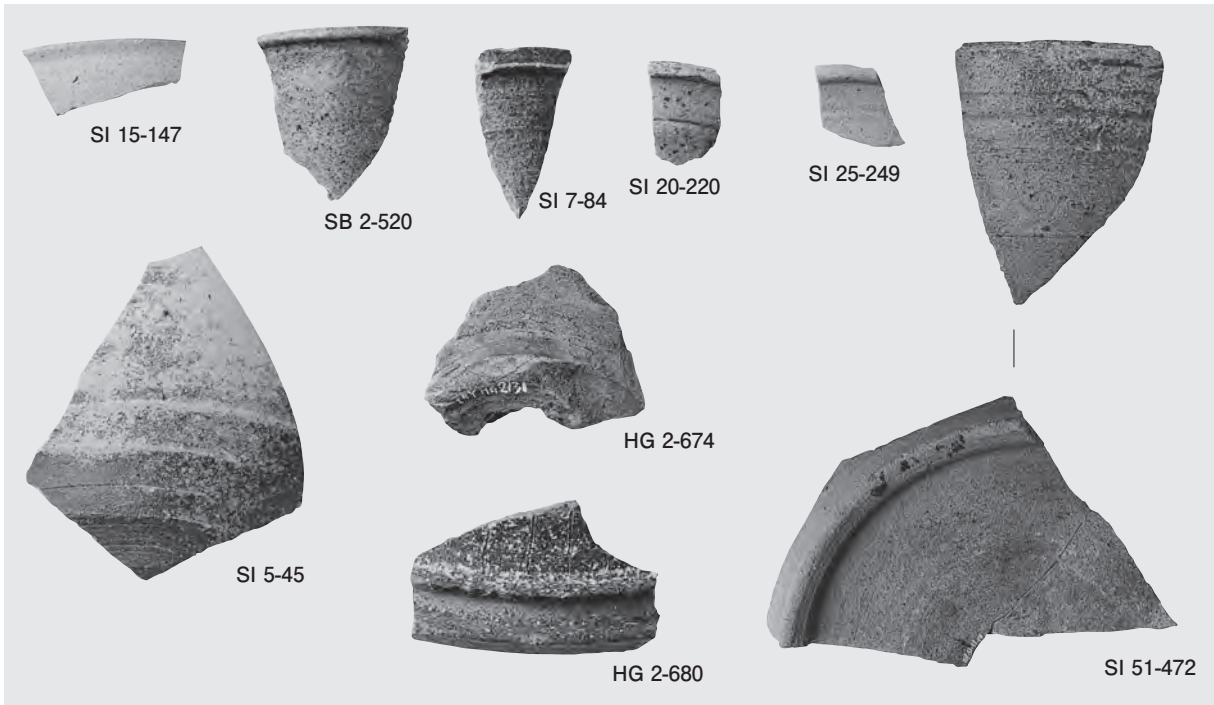


第55・87・99・108号住居跡，第1・16号掘立柱建物跡出土遺物

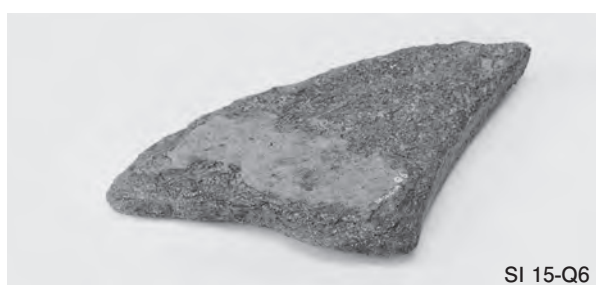




第47号住居跡，第14・16号掘立柱建物跡，第60・83号土坑，第2号遺物包含層出土遺物



第5・7・15・20・25・51号住居跡，第2号掘立柱建築物跡，第2号遺物包含層，第4・17・25号溝跡，遺構外出土遺物







SI 5-DP23



SI 15-DP57~59



SI 19-DP64・65



SI 20-DP68・69



SI 20-DP70・71



SI 28-DP88・89



SI 41-DP97・98



SI 51-DP143・144



SI 55-DP145



SM 1-DP157~159



SI 1-Q1



SI 6-Q2



SI 20-DP72



SI 9-Q5



SI 32-Q4



SI 47-Q11



SI 51-Q13

出土土製品, 石器, 石製品

PL62

I・Ⅲ区



SI 51-Q14



SI 108-Q46



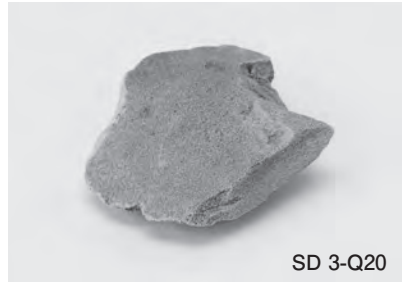
SB 5-Q16



SK 162-Q19



SK 66-Q18



SD 3-Q20



SD 7-Q21



SD 7-Q22



SI 6-M4



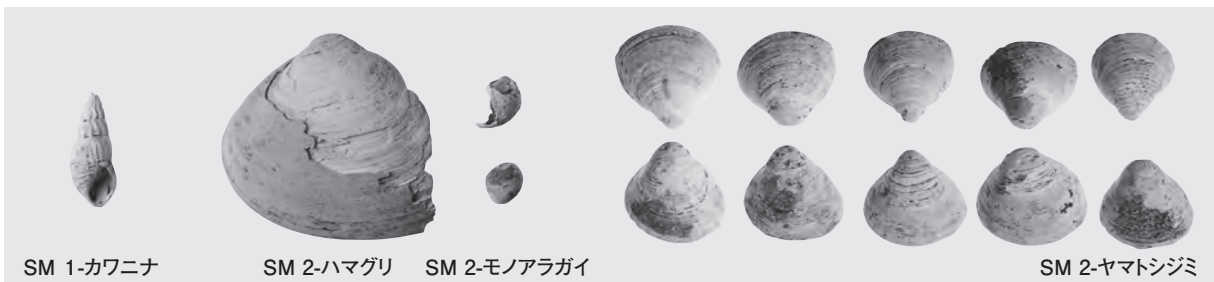
SB 8-M25



HG 2-M36



SM 2-ヤマトシジミ (一部)



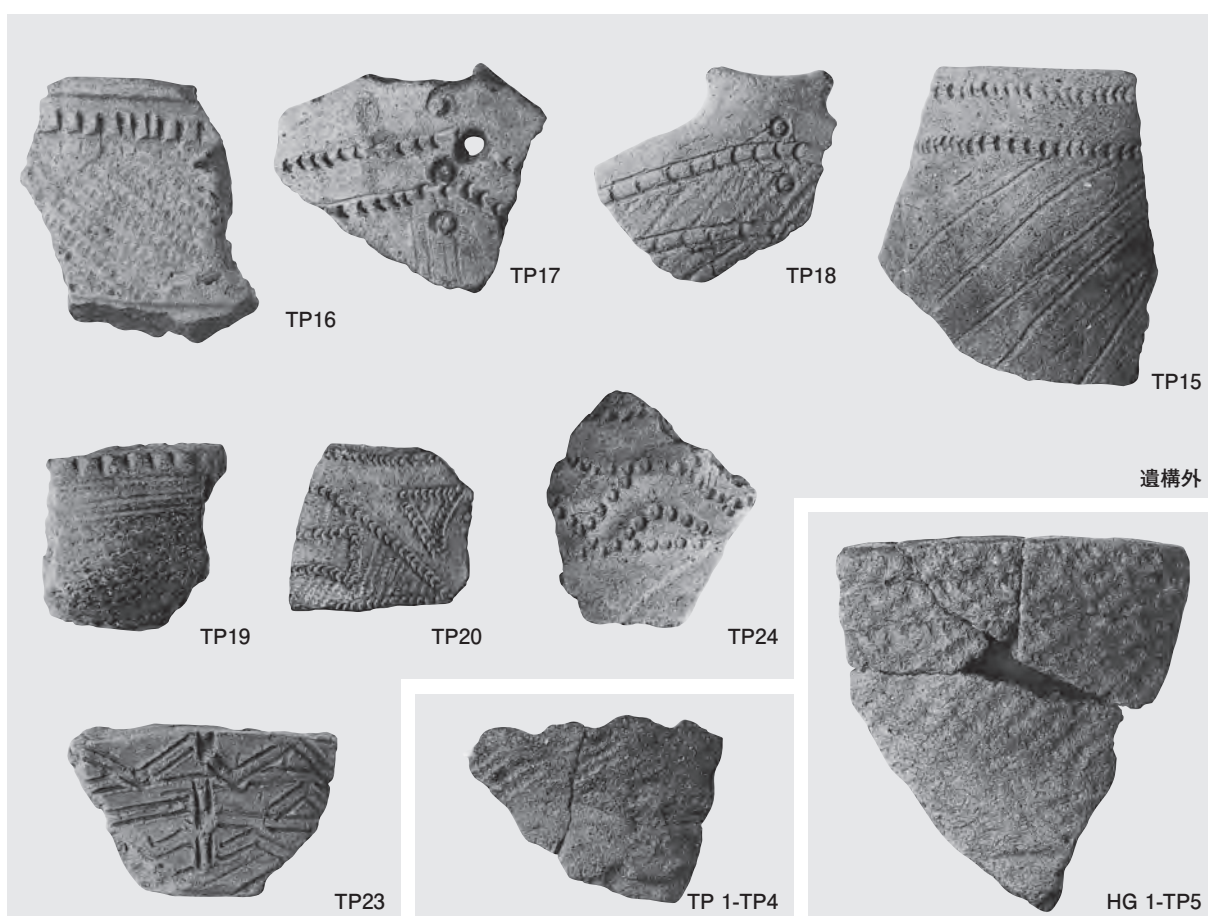
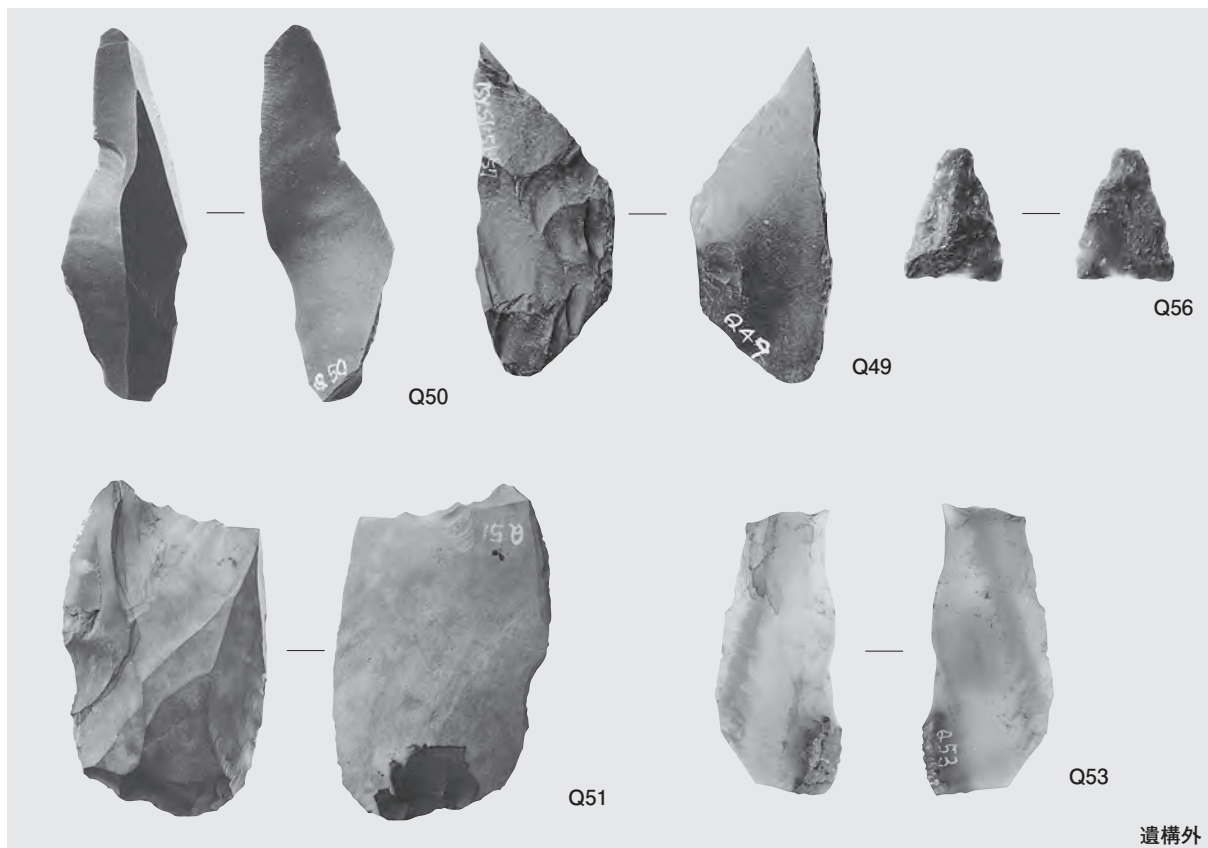
SM 1-カワニナ

SM 2-ハマグリ

SM 2-モノアラガイ

SM 2-ヤマトシジミ

出土石器, 金属製品, 貝



旧石器時代，縄文時代出土遺物





その他の出土遺物



Ⅱ区全景（東から）



Ⅳ区全景（東から）

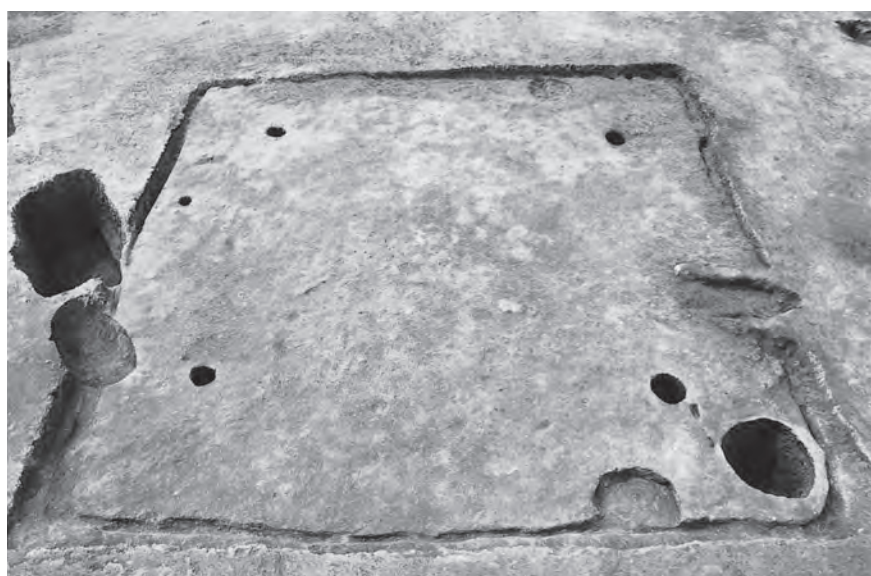




第111号住居跡  
完掘状況



第112号住居跡  
完掘状況



第113号住居跡  
完掘状況





第113号住居跡  
貯蔵穴遺物出土状況



第113号住居跡  
竈遺物出土状況



第114号住居跡  
完掘状況





第115号住居跡  
完掘状況



第115号住居跡  
竈完掘状況



第118号住居跡  
完掘状況

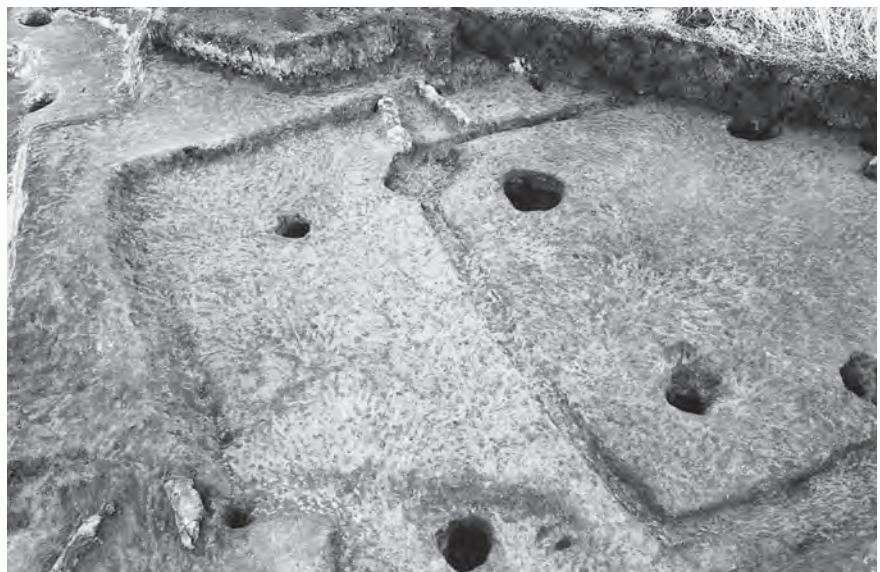




第127号住居跡  
竈完掘狀況



第128号住居跡  
完掘狀況



第131号住居跡  
完掘狀況





第133号住居跡  
完掘状況



第133号住居跡  
遺物出土状況



第135号住居跡  
完掘状況





第137号住居跡  
完掘狀況



第137号住居跡  
竈遺物出土狀況



第140号住居跡  
完掘狀況





第143号住居跡  
完掘状況



第144号住居跡  
完掘状況



第144号住居跡  
竈完掘状況





第151号住居跡  
完掘狀況



第151号住居跡  
竈灰出土狀況



第153号住居跡  
完掘狀況





第154号住居跡  
完掘狀況



第157号住居跡  
遺物出土狀況



第159号住居跡  
完掘狀況





第169号住居跡  
完掘狀況



第170号住居跡  
完掘狀況



第170号住居跡  
遺物出土狀況





第170号住居跡  
P1遺物出土状況



第171号住居跡  
完掘状況

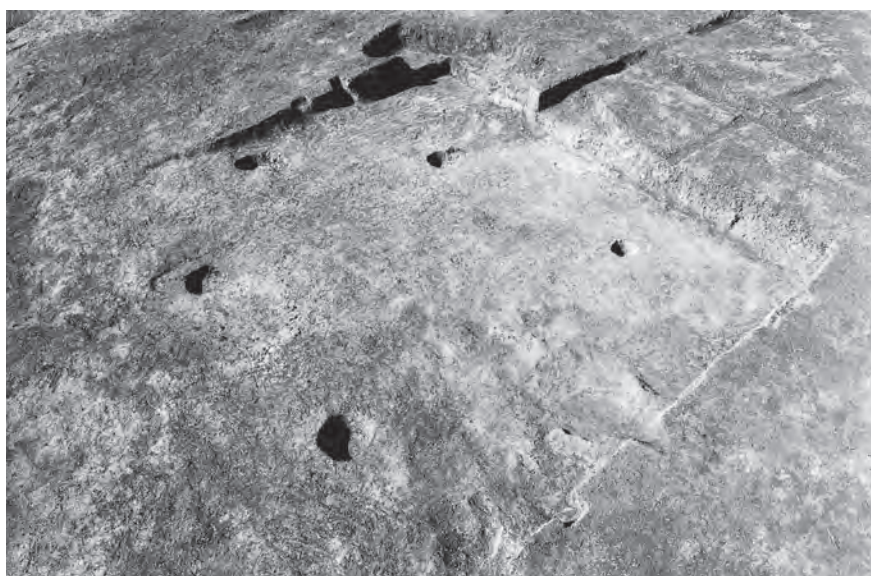


第171号住居跡  
竈遺物出土状況





第174号住居跡  
完掘狀況



第175号住居跡  
完掘狀況

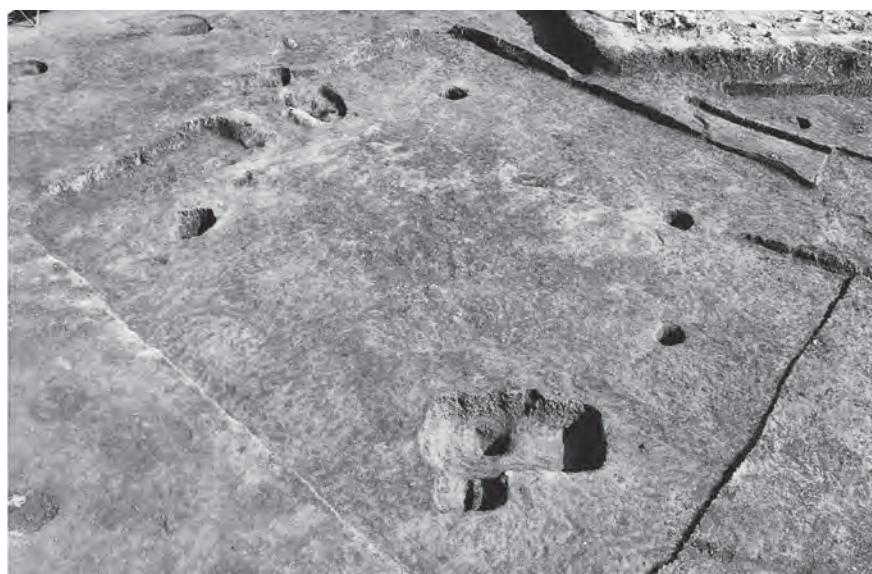


第175号住居跡  
遺物出土狀況





第179号住居跡  
完掘状況



第187号住居跡  
完掘状況



第187号住居跡  
遺物出土状況





第116号住居跡  
完掘狀況



第116号住居跡  
遺物出土狀況



第116号住居跡  
遺物出土狀況





第117号住居跡  
完掘状況



第117号住居跡  
竈遺物出土状況



第119号住居跡  
完掘状況



第119号住居跡  
遺物出土狀況



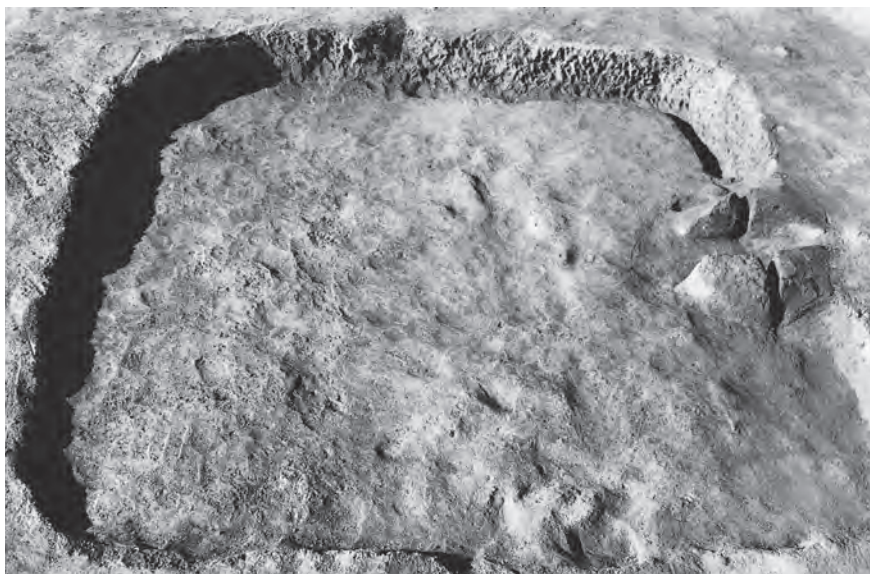
第119号住居跡  
竈遺物出土狀況



第120号住居跡  
完掘狀況







第122号住居跡  
完掘状況



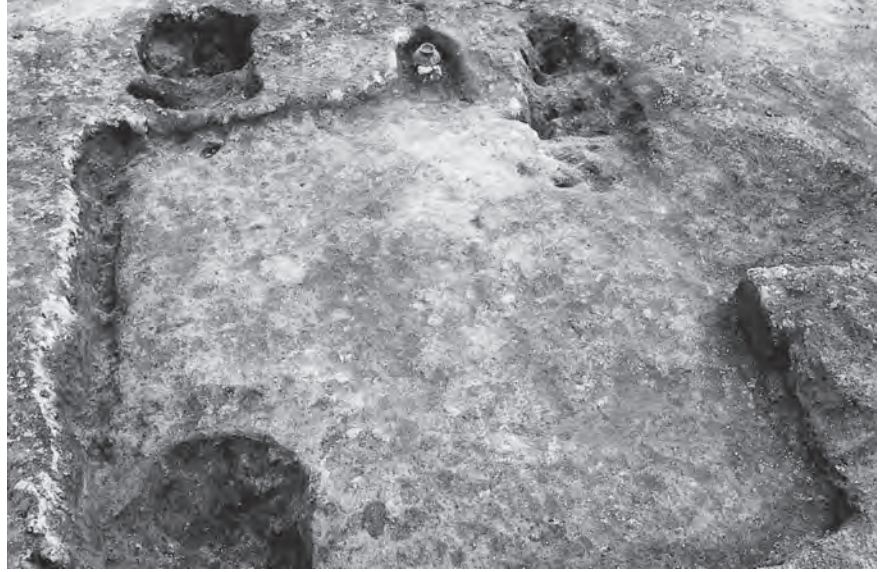
第123号住居跡  
遺物出土状況



第124号住居跡  
完掘状況



第125号住居跡  
完掘狀況



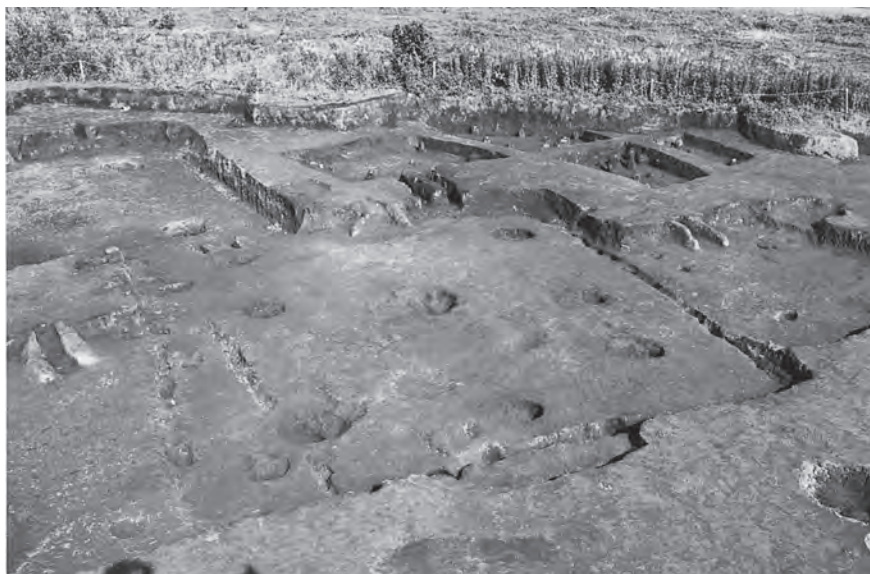
第125号住居跡  
竈遺物出土狀況



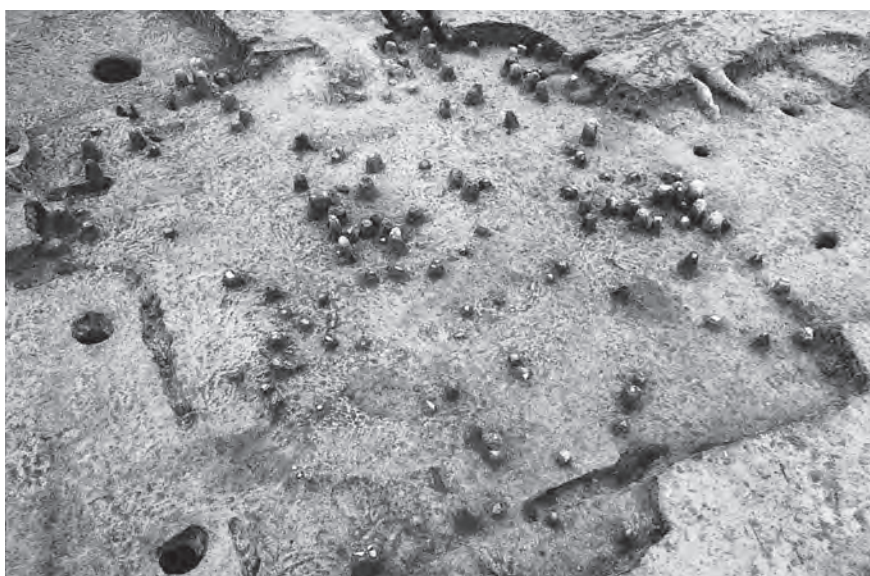
第126号住居跡  
完掘狀況







第130号住居跡  
完掘状況



第130号住居跡  
遺物出土状況



第130号住居跡  
遺物出土状況

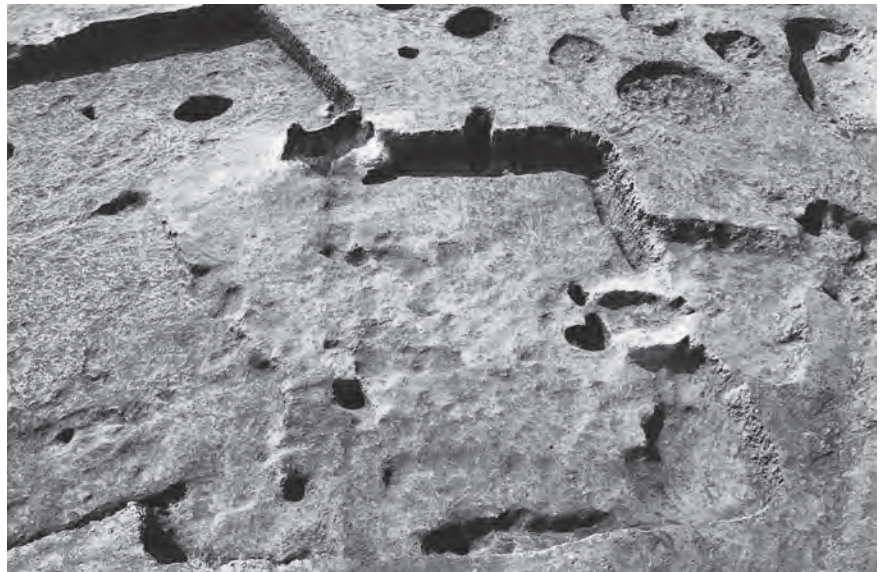




第138号住居跡  
完掘状況



第138号住居跡内  
第6号地点貝塚遺物出土状況

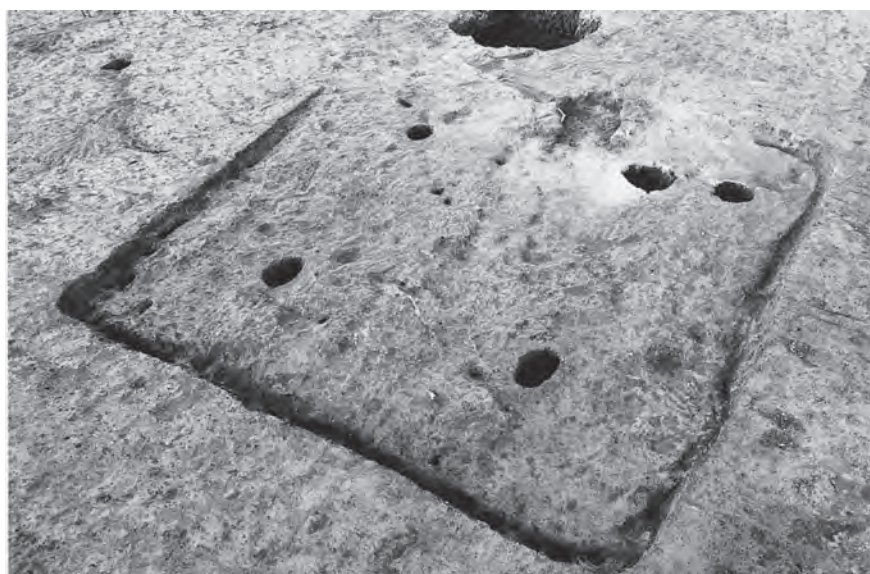


第141号住居跡  
完掘状況





第142号住居跡  
完掘狀況



第145号住居跡  
完掘狀況



第146号住居跡  
完掘狀況





第147号住居跡  
完掘狀況



第147号住居跡内  
竈遺物出土狀況

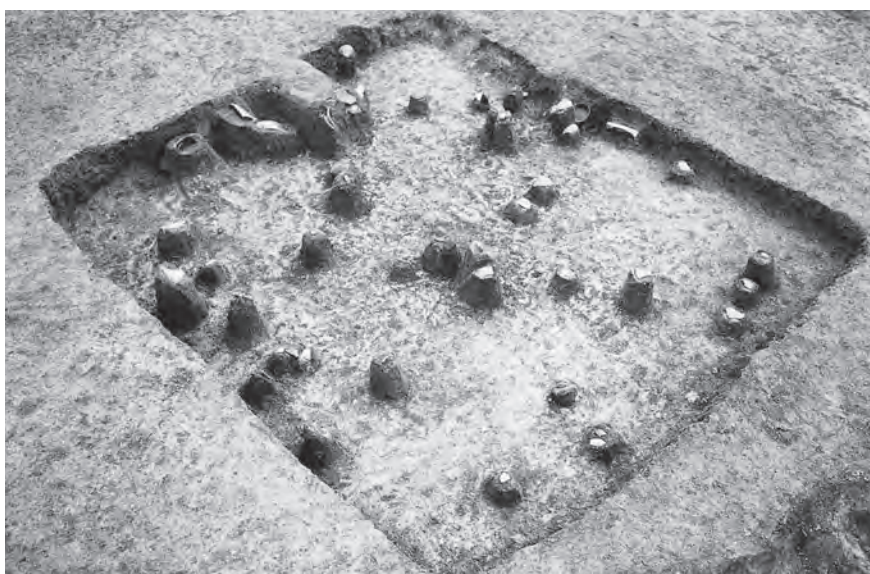


第155号住居跡  
完掘狀況





第158号住居跡  
完掘状況



第158号住居跡  
遺物出土状況

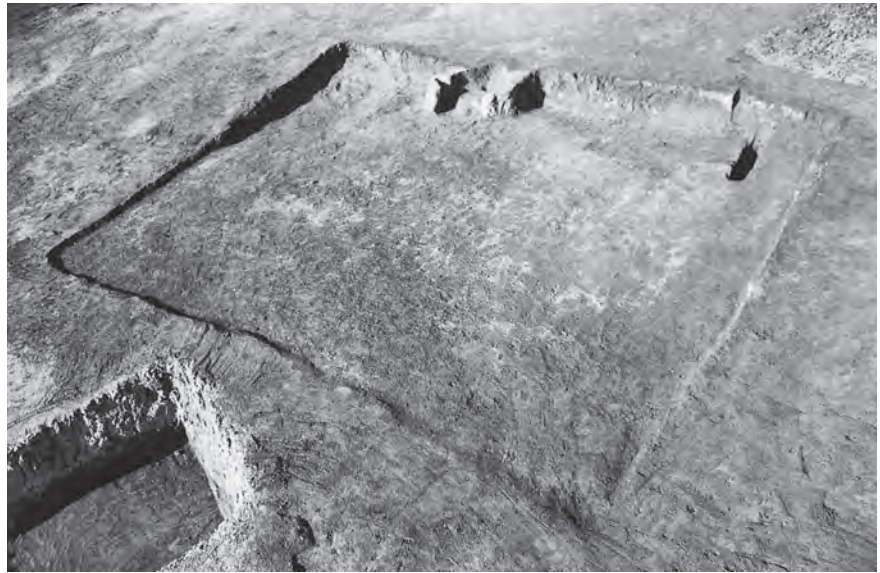


第158号住居跡  
竈遺物出土状況





第160号住居跡  
遺物出土狀況



第161号住居跡  
完掘狀況



第161号住居跡  
竈遺物出土狀況





第162号住居跡  
遺物出土狀況



第165号住居跡  
完掘狀況



第168号住居跡  
完掘狀況





第173号住居跡  
完掘狀況



第176号住居跡  
完掘狀況

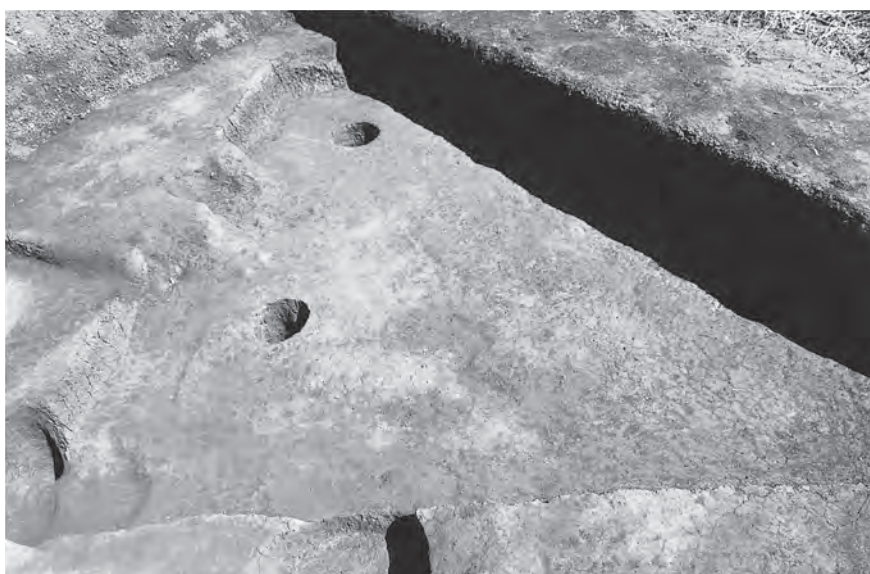


第177号住居跡  
完掘狀況





第182号住居跡  
完掘状況



第189号住居跡  
完掘状況

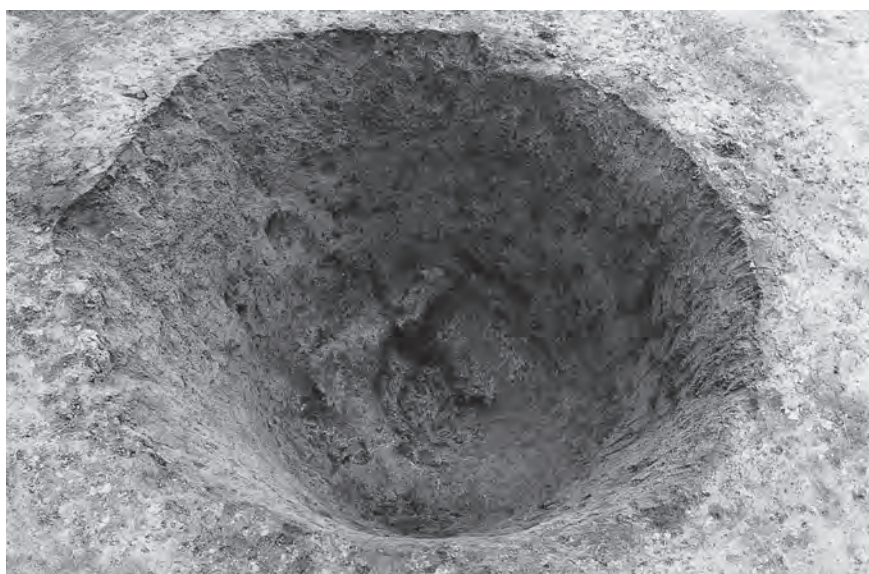


第189号住居跡  
竈遺物出土状況

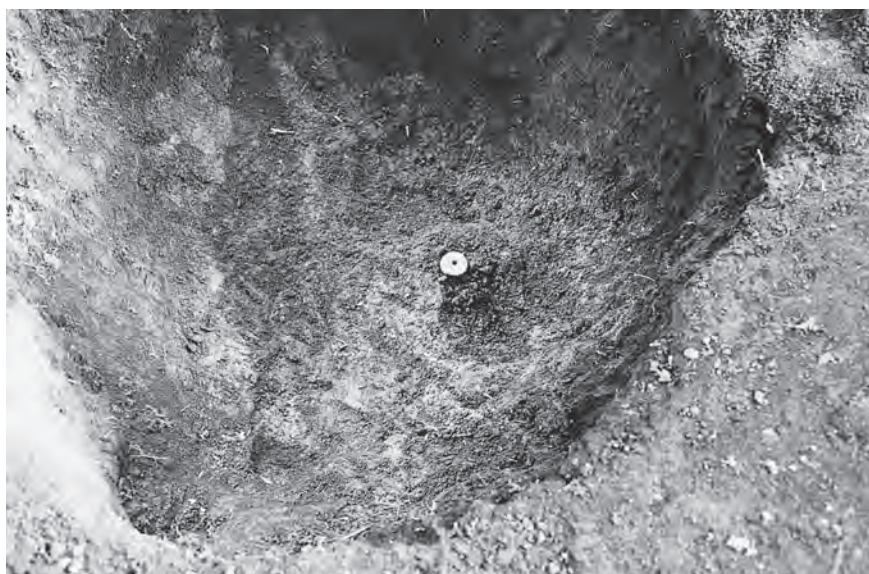




第5号遺物包含層  
遺物出土狀況



第1号豎穴状遺構  
完掘狀況

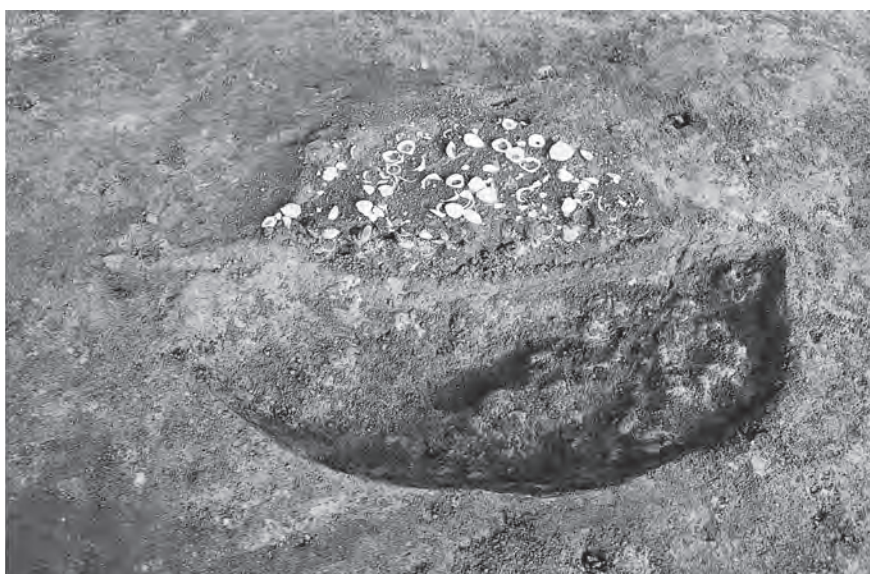


第715号土坑  
遺物出土狀況

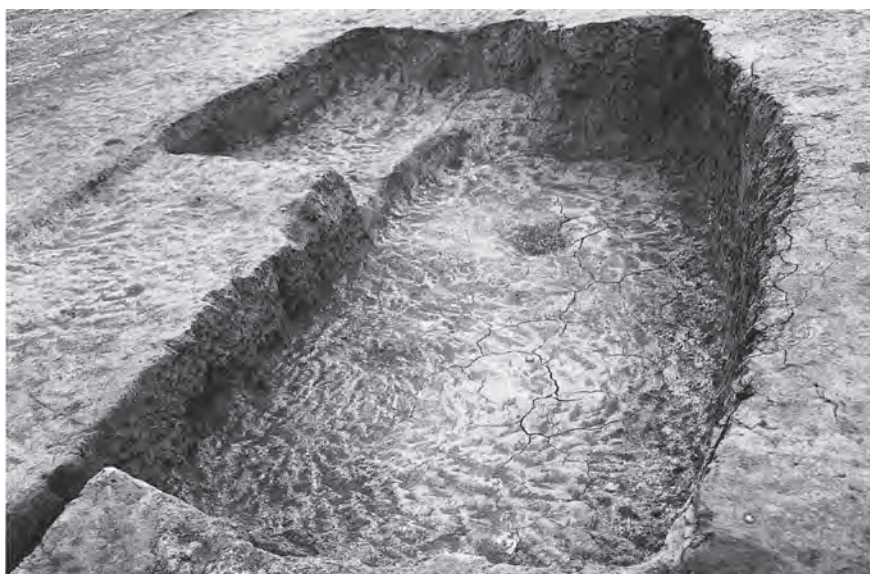




第 549 号 土 坑  
遺 物 出 土 状 况



第 7 号 地 点 貝 塚  
遺 物 出 土 状 况



第 6 号 方 形 豎 穴 遺 構  
第 634 号 土 坑  
完 掘 状 况



第 1 号 道路 跡  
硬化面 確認 狀況



第 34・35 号 溝 跡  
完 掘 状 況



第 41・46 号 溝 跡  
完 掘 状 況







第611号土坑 完掘状况



第581号土坑 完掘状况

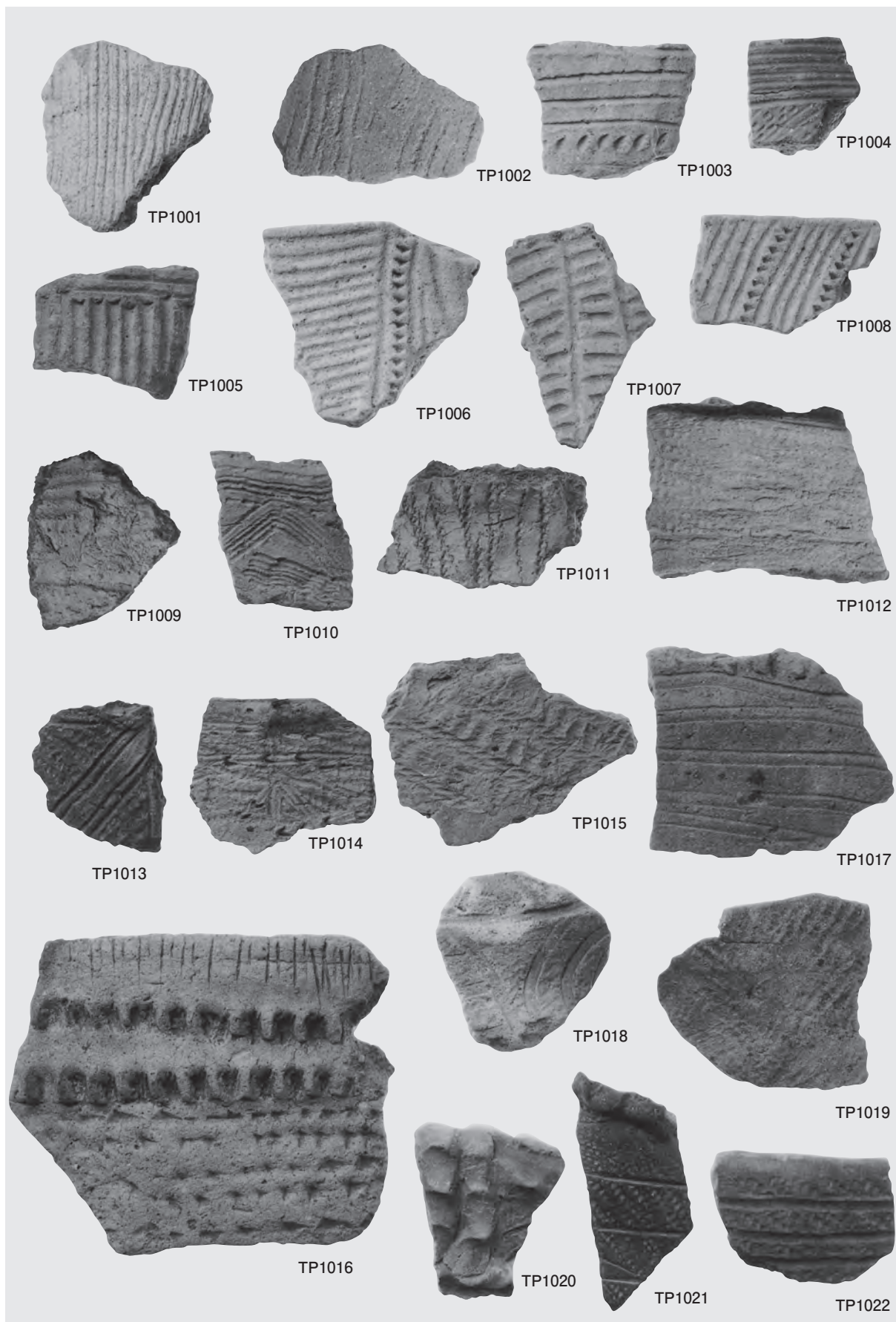


第1号地下式坑 完掘状况



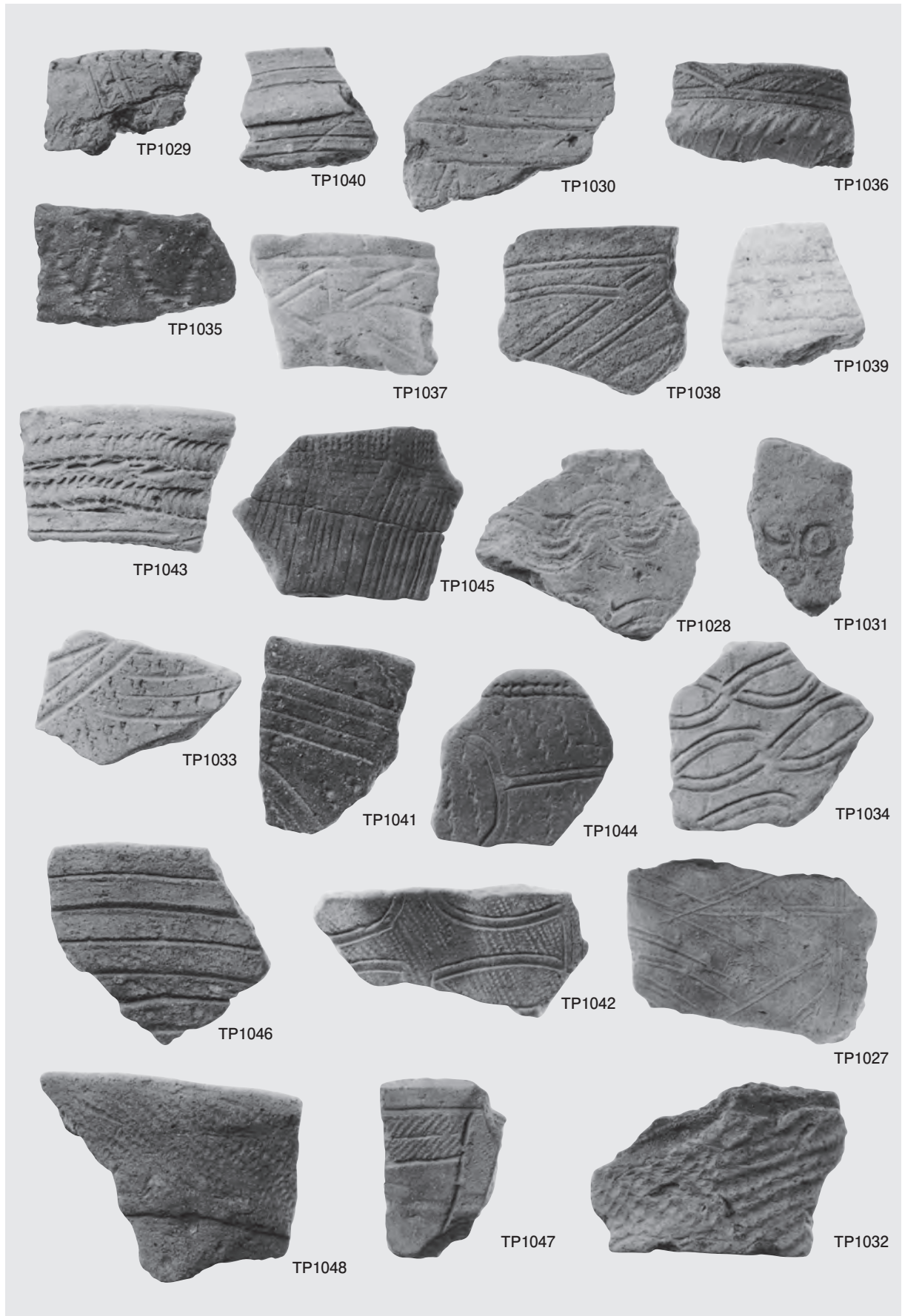
第1号道路迹, 第27号沟迹 完掘状况





遺構外出土遺物（Ⅱ区縄文時代）





遺構外出土遺物 (Ⅳ区縄文時代)



SI 111-1002



SI 111-1003



SI 111-1004



SI 111-1005



SI 111-1006



SI 113-1028



SI 113-1024



SI 113-1026



SI 113-1025



SI 111-1013

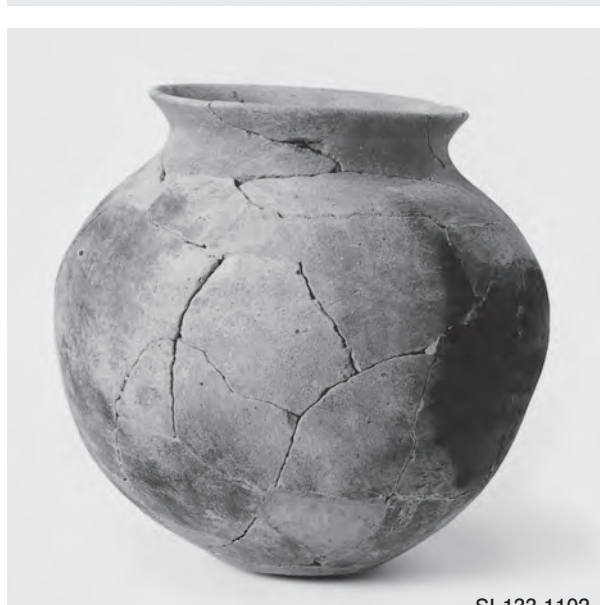












第133·140·151号住居跡，第469号土坑出土遺物







第154号住居跡，第5号遺構包含層出土遺物







第171・175号住居跡出土遺物





第175・179号住居跡，遺構外出土遺物





PL110

Ⅱ·Ⅳ区



第116·117·130·138号住居跡出土遺物





PL112

Ⅱ·Ⅳ区



第162·168·173号住居跡，第468·564号土坑出土遺物



第173・177・178号住居跡出土遺物



PL114

Ⅱ·Ⅳ区



第182·189号住居跡，第759号土坑出土遺物



遺構外出土遺物



PL116

Ⅱ・Ⅳ区







PL118

Ⅱ・Ⅳ区



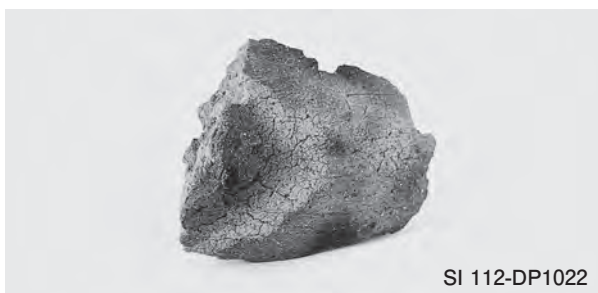
SI 171-DP1256



SI 116-DP1167



SI 152-DP1244



SI 112-DP1022



SI 115-DP1251



SI 175-DP1267

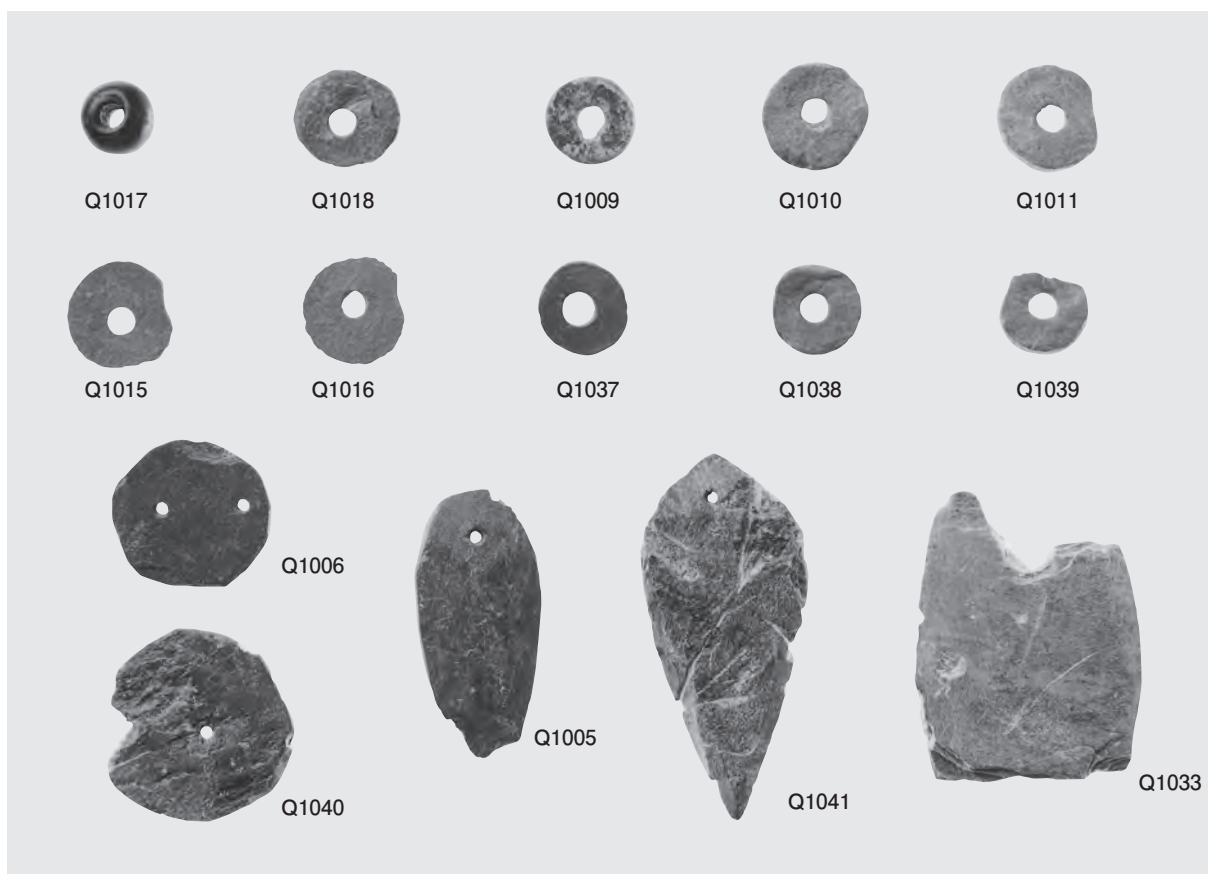
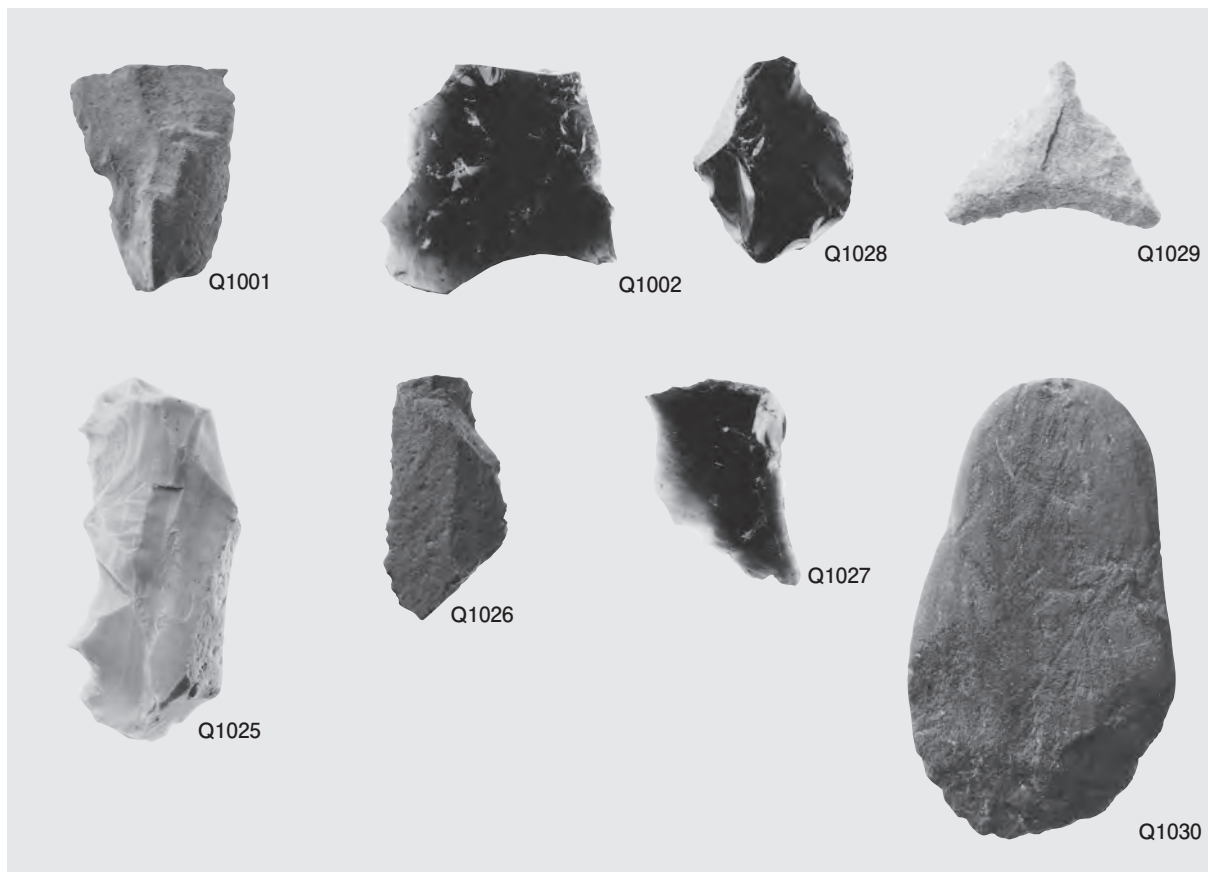


SI 117-DP1173



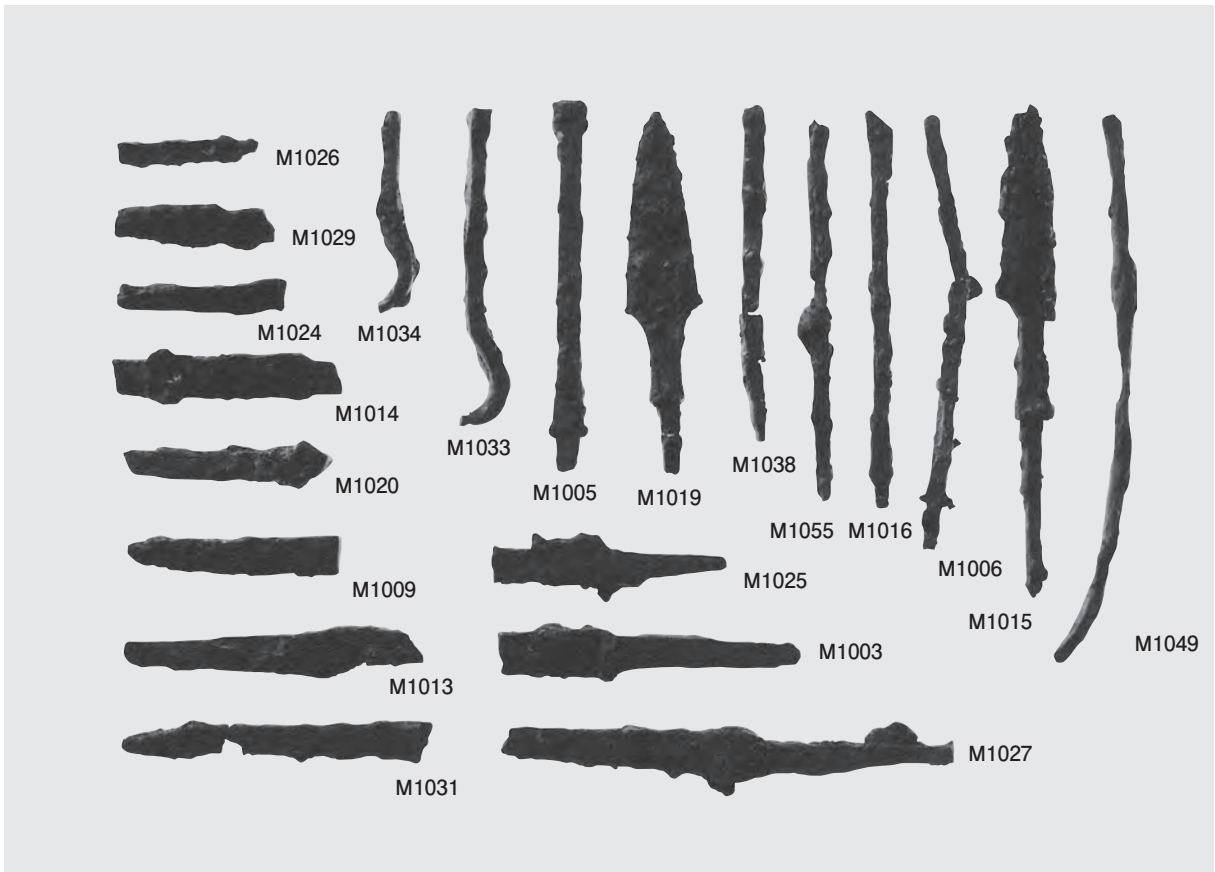
SI 137-DP1095

第112・115・116・117・137・152・171・175号住居跡出土土製品

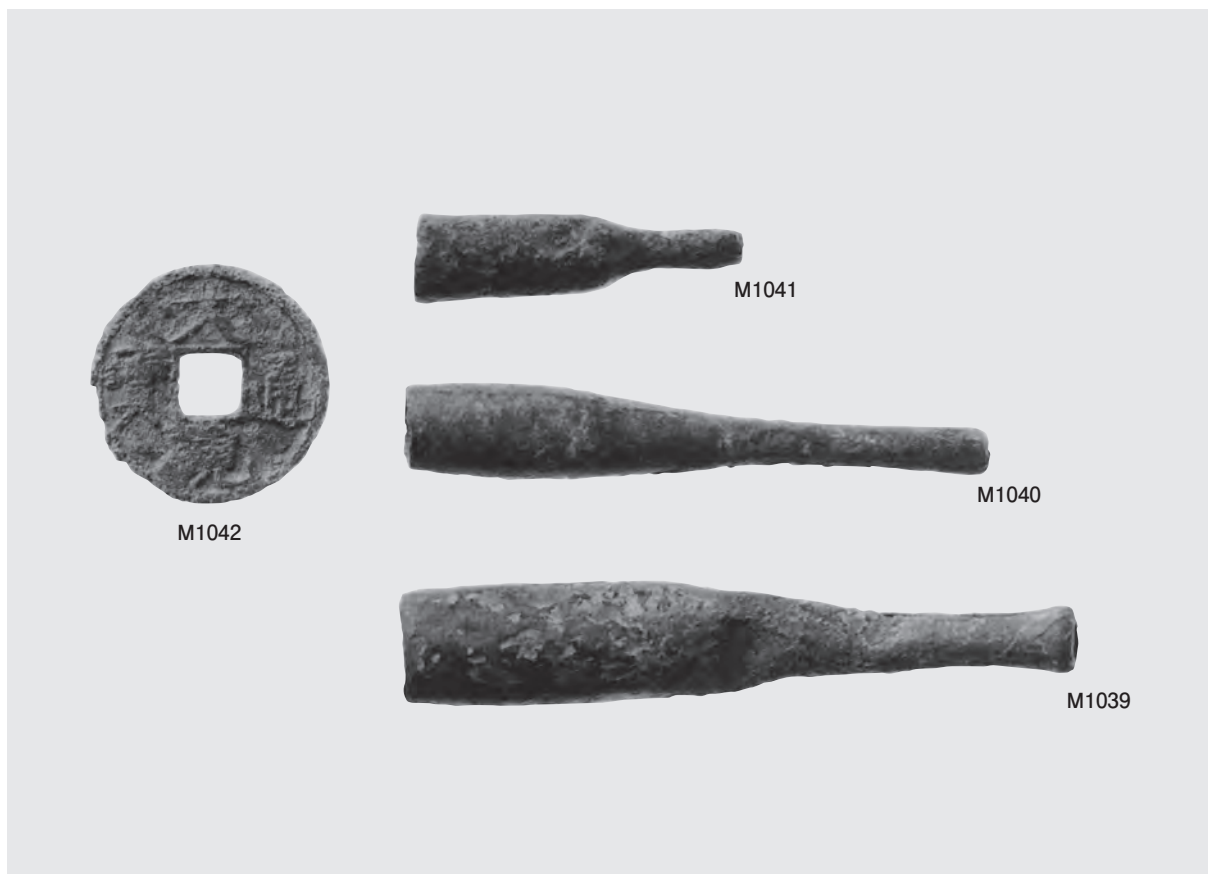
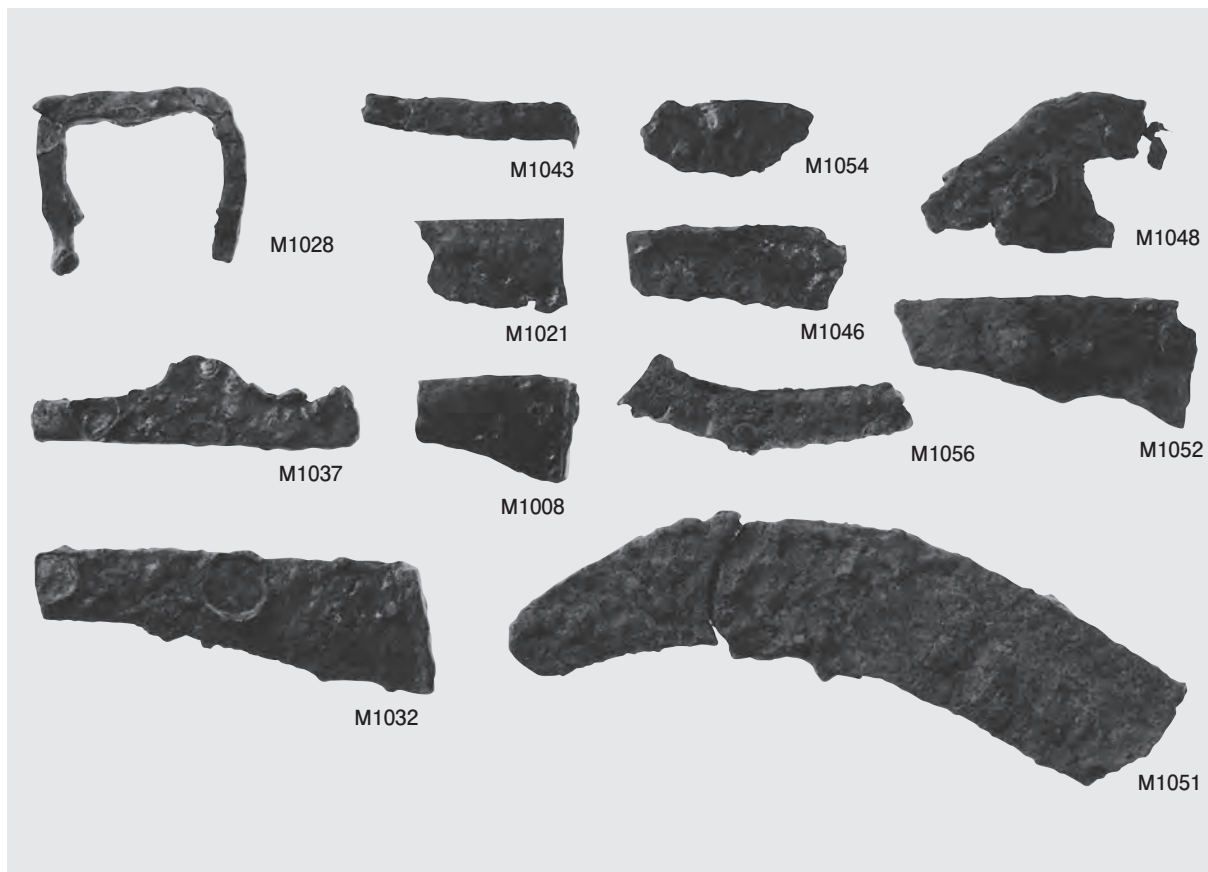


出土石器, 石製品 (1)





出土石器・石製品（2），金属製品（1）



出土金属製品 (2)



# 抄 録

ふりがな	やくしうしろいせき							
書名	薬師後遺跡							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第308集							
著者名	成島一也 大関 武 齋藤和浩 鹿島直樹 早川麗司							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2009(平成21)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
薬師後遺跡	茨城県稲敷市 椎塚字薬師後 1,376番地ほか	08229 -	35度 56分 5秒	140度 20分 24秒	25 ~ 28m	20060601 ~ 20070331	7,833㎡	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設に伴う事前調査
	茨城県稲敷市 椎塚字大久保 1,369番地ほか	441149				20070601 ~ 20080331	8,437㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
薬師後遺跡	散布地	旧石器			石器(ナイフ形石器, 搔器, 剥片)		平安時代の住居跡の竈から、ヘラで鳥の絵が描かれた須恵器坏が出土した。また、東海地方で生産された灰釉陶器・緑釉陶器や、須恵器の円面硯、刻書された石製紡錘車の出土も注目される。	
	狩り場	縄文	陥し穴 遺物包含層	2基 1か所	縄文土器, 石器			
	集落跡	古墳	竪穴住居跡 地点貝塚 土坑 遺物包含層	93軒 1か所 8基 3か所	土師器, 須恵器, 土製品, 石器, 石製品, 鉄製品, 銅製品, 貝			
		奈良・平安	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 竪穴状遺構 地点貝塚 土坑 遺物包含層	81軒 18棟 2基 3か所 28基 1か所	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 土製品, 石器, 石製品, 鉄製品, 貝, 骨			
		中世・近世	方形竪穴遺構 火葬土坑 地下式坑 粘土貼土坑 土坑 溝跡	7基 5基 1基 1基 102基 26条	土師質土器, 陶器, 土製品, 石器, 鉄製品, 古銭			
		時期不明	竪穴住居跡 地点貝塚 溝跡 道路跡 土坑 ピット群	9軒 2か所 23条 2条 490基 5か所				
要約	薬師後遺跡は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。主体となるのは古墳時代後期(6世紀)から平安時代後期(11世紀)にかけての集落跡で、当該期の住居跡183軒が確認された。特に、張出部を出入り口に持つ住居跡が注目される。また、9~10世紀には18棟の掘立柱建物も構築され、中でも5間×3間の第5号掘立柱建物跡は、桁行き約9m、梁行き約6mの大形の建物である。							

茨城県教育財団文化財調査報告第308集

薬 師 後 遺 跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業地内埋蔵文化財調査報告書

下 巻

平成21（2009）年3月18日 印刷

平成21（2009）年3月23日 発行

発行 財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 あけぼの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号

TEL 029-227-5505





付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第308集

薬師後遺跡遺構全体図





付図 薬師後遺跡遺構全体図 茨城県教育財団文化財調査報告第308集